

は石刀で石材は粘板岩である。58・59は丸玉で中央が両側から穿孔され、58は片面に研磨痕がみられる。石材は緑色凝灰岩で59はガラス質である。

Ⅲ. 土製品

耳飾1点、土製垂飾5点、スタンプ形土製品1点を図化した(図III-2-44)。形状や断面形態はH28年度報告に準じた。以下、図化資料の特徴を述べる。

1は滑車形で断面は盃形に近い形状を呈し、全体に赤彩が施される。正面の縁は波状に成形され、内面はゆるやかな複数の段状を成す。2~6は土製垂飾で分銅形の形状を呈し、全体に赤彩が施される。上部に穿孔を有し、下部は丸みを帯びて膨らむ。7は一端が欠損しているが、山の字状に成形された土製品である。片面につまみ状の突起を有し、中央に穿孔が施される。反対側の表面は形状に沿う複数の沈線が巡る。形状から、スタンプ形土製品の一種ではないかと考えられる。



図III-2-44 2区遺構外出土土製品

3.3区

X=128~152、Y=134~176、標高約6~8mに位置し、調査対象面積および調査面積は456.759m²である。検出遺構は縄文時代の土坑3基が確認された。(図III-2-45)3区は南側が溜池に面しており、本調査区のなかで、最も前調査区に近い場所に位置する。他の調査区と同様擾乱による砂層が堆積し、Ⅲ層の上面まで擾乱を受けている箇所も確認された。

(1) 検出遺構

i. 土坑

第1902号土坑(SK1902)墓(図III-2-46)

【位置・確認】X=132~134、Y=158~160に位置する。IV層で確認された。【重複】無し。

【規模・形状】II Aa ①類(H28年度報告の分類基準に準じる)。長軸2.3m、短軸1.5m、深さ0.77m、周溝の深さ0.31mを呈する。長軸方位はN89°-Eである。梢円形を呈し、上部は一部擾乱により削平されているが黄褐色粘土によるマウンドがあり、底面には深さ約10cmの周溝が巡る。【堆積土】5層確認された。I層はマウンドを形成する粘土層である。【出土遺物】土坑底面から4群の鉢、漆器および骨片が確認された。漆器については第4章第2節で詳細を述べる。また上部マウンドからは7群の注口土器が確認された。遺構内から748.6gの土器が出土し、うち9点を図化した(図III-2-47)。1は3群の精製深鉢である。口唇部の断面は丸く内面に沈線が巡る。口唇直下にLR斜縫文が施され、体上部に3本の横位沈線が巡る。2・3は4群の精製深鉢である。2はゆるやかに立ち上



がり口縁部が外反する。口縁部の形態は平縁である。口縁上部に横位沈線が巡り、その下に2本の沈線による半円文が施される。3はゆるやかに立ち上がり、口縁部は山形突起が連続する。口縁上部に横位沈線に挟まれた列点文が巡る。体上部は枝分かれする入組文が施される。4~6は4群の精製鉢である。4は口縁部に山形突起が四方に配置され、突起を縁取る1本の弧状沈線が施される。体上部は枝分かれする入組文と、2本の横位沈線が巡る。5は口縁部に頂部が凹む山形突起が等間隔で配置される。体上部は2本の横位沈線が巡り、体部はLR斜繩文が施される。6は口縁部が平縁で口唇部の断面が角張る。口縁上部に枝分かれする入組文と2本の横位沈線が巡る。7は5群の注口である。体部のみであるが、頸部が体部にくい込む器形を呈する。頸部および体部

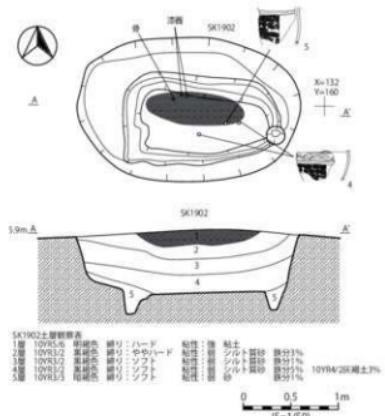
に横位沈線と半円の弧状沈線の間を短沈線による刻目が連続する。8は3~5群の深鉢である。体部にLR斜繩文が施される。9は7a群の注口である。頸部に雲形文の一部が確認できる。注口部の根元に頂部が凹む菱形状の突起を有する。骨片については残存状態が悪く、部位等詳細は不明である。

【時期】出土遺物より7群以降と考えられる。

第1904号土坑（SK1904）（図III-2-48）

【位置・確認】X = 134~138、Y = 142~144に位置する。V層で確認された。【重複】無し。

【規模・形状】長軸4.2m、確認範囲で短軸2.9m、深さ0.49cmで楕円形を呈する。長軸方位はN65°-Eである。【堆積土】2層確認され、1層に炭が集中している箇所が確認された。【出土遺物】遺構内から1297.4gの土器が出土し、うち4点を図化した（図III-2-49）。1は2a群の粗製深鉢である。ゆるやかに立ち上がる器形を呈し、口唇部断面は角張る。体部はRL斜繩文が施される。2は2b群



図III-2-46 SK1902

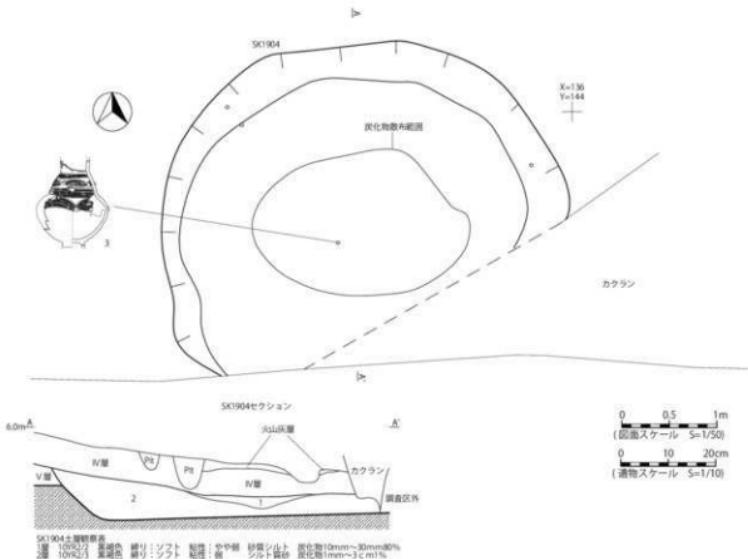


図III-2-47 SK1902 出土遺物

の壺である。口唇部断面は丸みを帯びる。体部は無文である。3・4は2b群の注口である。3は台付注口であり、体部下半は球胴状を呈する。体部上半は下半から屈曲したのち内傾しながら立ち上がり、口頸部はわずかに外傾する。口縁部は欠損しており、体部上半は上下に2～3本の横位沈線と、配置された瘤の間を4本の弧状沈線が巡る。体部下半は瘤が上下にずれて配置され、下位の瘤に集約するように半円状の4～6本の弧状沈線が巡る。体部全体の沈線間ではない器面は調整され、沈線間はRL斜綱文が施される。台部は欠損しているが、径が小さく末広がりの形状であるとみられる。4は外傾しながら立ち上がり、屈曲したのち短く直立する。口唇部断面はやや角張り、無文である。【時期】出土遺物より2a群以降と考えられる。

第1905号土坑（SK1905）（図III-2-50）

【位置・確認】X = 138、Y = 140に位置する。V層で確認された。【重複】無し。【規模・形状】長軸1.8m、短軸1m、深さ0.38m。長軸方位はN56°-Eである。【堆積土】2層確認された。堆積状況から自然堆積とみられる。【出土遺物】無し。【時期】時期を判定する遺物が無いため、不明である。

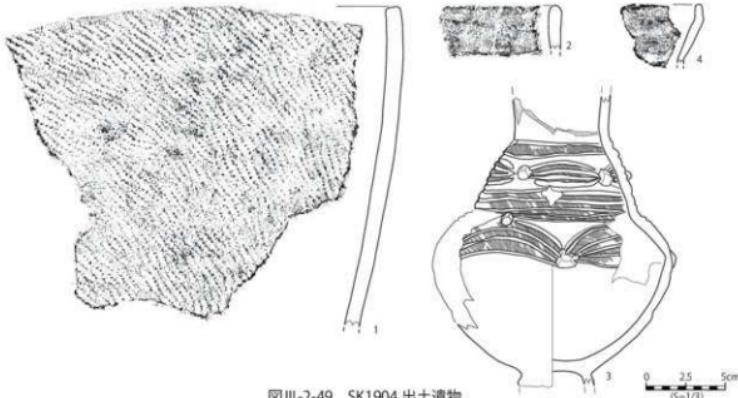


図III-2-48 SK1904

(2) 出土遺物

i. 繩文土器

3区では縩文土器が936点、131,885.3 g出土した。そのうち赤彩土器は43点、1,514.7 gである。以下、各層位出土土器の詳細を述べる。



図III-2-49 SK1904出土遺物

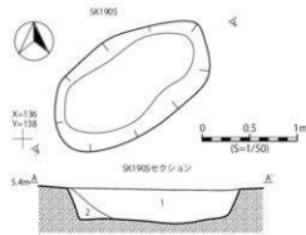
V層 (図III-2-51)

8群の深鉢3点、2a群の鉢1点、7群の鉢1点、9群の浅鉢1点、10群の浅鉢1点の計7点を図化した。

1～3は8群の半精製深鉢である。体上部に3本の横位沈線が巡り、体部は条痕が施される。4は2a群の精製鉢である。底部から外側に広がりながら立ち上がる。体部中央に隆帯が施され、隆帯部分の幅に鋸歯状沈線が横に連続する。5は7群の半精製鉢である。肩部に屈曲点をもち口縁部が軽く外反する。口唇部直上に刻目が施され、口縁上部に3本の横位沈線が巡る。6は9群の精製浅鉢である。大洞A2式にあたる。口縁部に頂部に刻みが入る山形突起が配置され、体部に匹字文が施される。7は10群の精製浅鉢である。口縁部に頂部に刻みが入る山形突起が配置され、体部は変形工字文が施される。

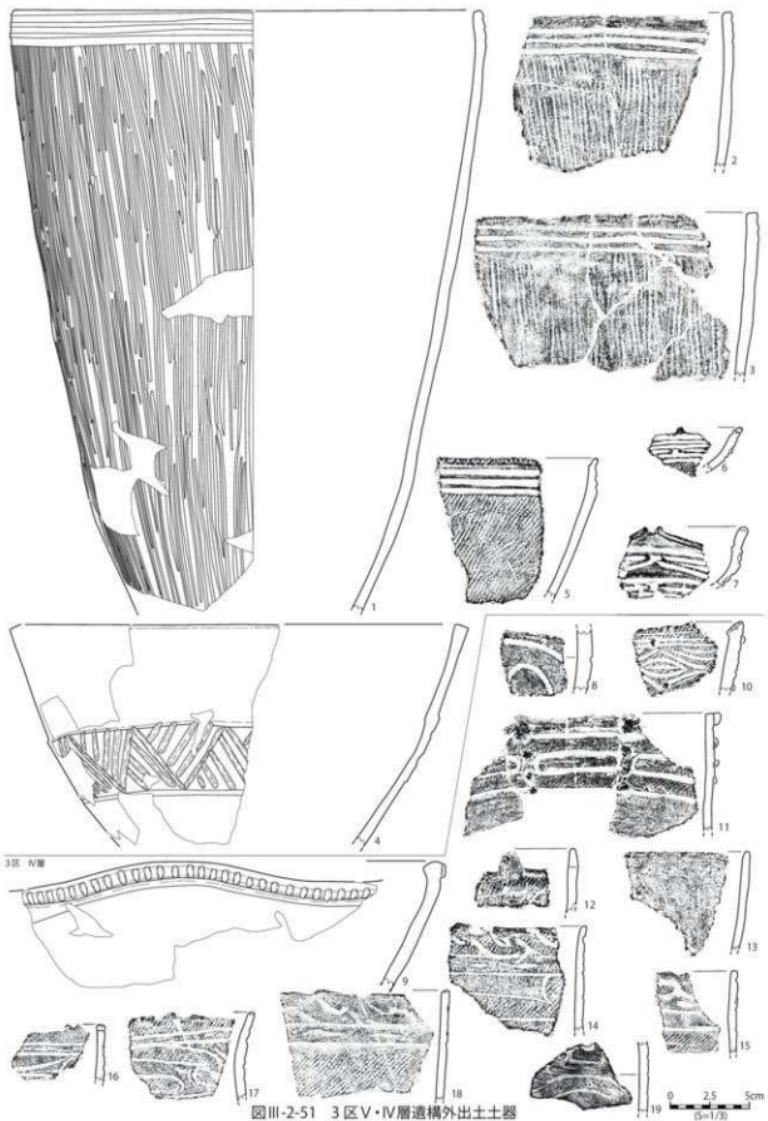
IV層 (図III-2-51～59)

2群の深鉢1点、2a群の深鉢1点、2b群の深鉢3点、2c群の深鉢1点、3群の深鉢4点、4群の深鉢2点、5群の深鉢1点、3～5群の深鉢8点、5～6群の深鉢1点、7群の深鉢2点、8群の深鉢34点、7～8群の深鉢2点、3～8群の深鉢1点、9群の深鉢4点、時期不明の深鉢1点、2a群の鉢2点、3群の鉢1点、4群の鉢2点、5群の鉢4点、6群の鉢4点、7群の鉢8点、8群の鉢16点、7～8群の鉢1点、3～8群の鉢1点、9群の鉢7点、2a群の浅鉢1点、8群の浅鉢19点、9群の浅鉢1点、10群の浅鉢2点、4群の壺1点、7群の壺5点、6～7群の壺1点、3～8群の壺1点、9群の壺2点、3群の注口1点、4群の注口1点、5群の注口1点、7群の注口1点、9群の蓋1点の計150点を図化した。



図III-2-51 SK1905

3区・V層



図III-2-51 3区V・IV層遺構外出土土器



8は2群の精製深鉢である。体部に弧状沈線が施される。9は2a群の精製深鉢である。波状口縁を呈し、口唇部が段差状に厚く整形され、刻目が横に連続する。10～12は2b群の精製深鉢である。10は口縁部に山形突起を有する。口唇部は斜状で内面に2本の縦位と横位の沈線が交互に連続する。体部は沈線間に瘤が配置され、菱形を呈する沈線が施される。11は沈線間に瘤が縦列状に等間隔で配置され、体部は帶繩文が施される。12は口縁部に山形突起を有し、体部に沈線が施される。13は2c群の粗製深鉢で無文である。14～17は3群の精製深鉢である。口縁上部にノの字状文が連続し、体部は入組帶繩文が施される。18・19は4群の精製深鉢である。18は口唇部直下にノの字状文が連続し、口縁上部の沈線間に列点文が施される。19は体部に枝分かれする入組文が施される。20は5群の精製深鉢である。口唇部に刻目が連続し、体上部に羊歯状文が施される。体上部と体部中央に穿孔が認められる。21～28は3～5群の粗製深鉢である。21～27は体部にLR斜繩文が施される。28はRL縦繩文が施される。29は5～6群の粗製深鉢で口縁部に刻目が連続し体部は無文である。30・31は7群の深鉢である。30は半精製であり、体上部に3本の横位沈線が巡り、体部はLR斜繩文が施される。31は粗製であり、口縁部が歪な波状を呈し、体部は無文である。

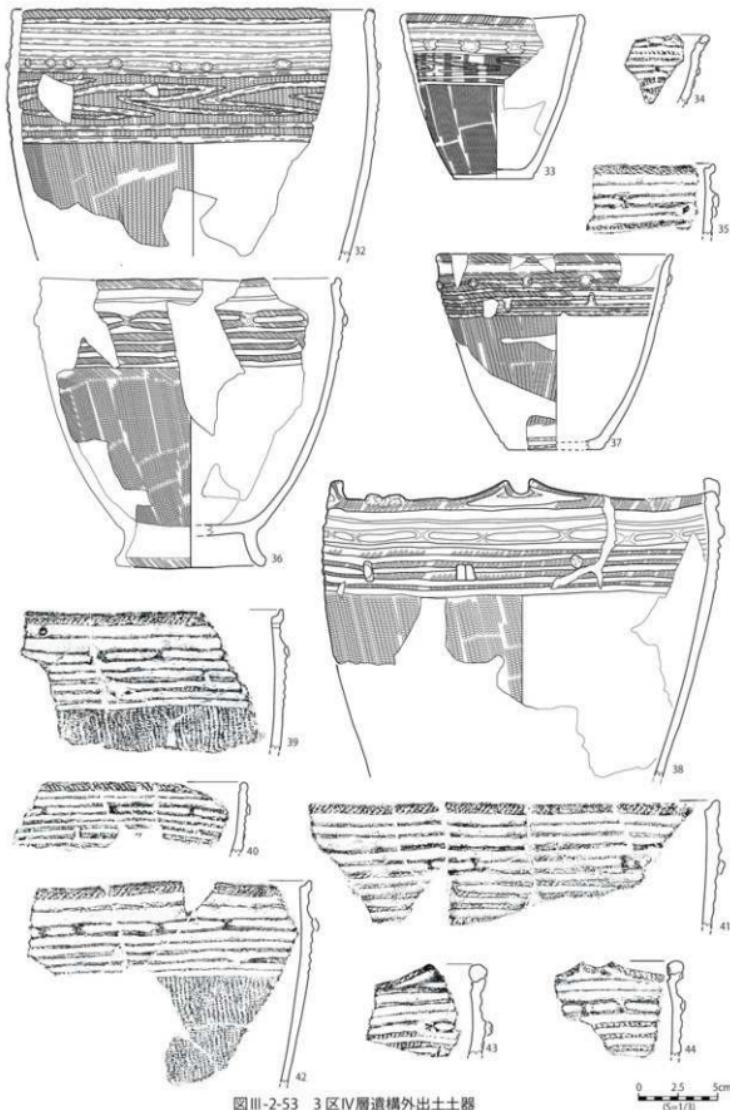
32～65は8群の深鉢である。32～44は精製であり、32～34は体上部の平行沈線間に粘土粒による結節をもち、体部は矢羽状文が施される。33は矢羽状文が向かい合う。35は体上部の平行沈線間に上下交互に連続する結節を持つ。36は台付鉢で体部に流水状工字文が施される。37は体上部の平行沈線間に粘土粒による結節を有し、体部は凸字状工字文が施される。38は口縁部にカルデラ状山形突起とB突起が等間隔で配置される。口縁上部の平行沈線間に粘土粒による結節をもち、体部は凸字状工字文が施される。39～43は体上部の平行沈線間に結節をもち、体部は沈線で区切る工字文が施される。44は口縁部にカルデラ状山形突起を有し、体上部の平行沈線間に結節、体部に横位沈線が施される。45～60は半精製であり、体上部に3本の横位沈線が巡る。46～48は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、51・54～58は内湾する器形を呈し、他はゆるやかに立ち上がる。体部の施文は、45・46がLR斜繩文、47～49・54・55がLR縦繩文、50がRL斜繩文、51・52がRL縦繩文、53が横位沈線直下にLR斜繩文およびその下にLR縦繩文、56がRL縦繩文、57～60は条痕文が施される。

61～65は粗製である。61は口縁部が内湾し、他はゆるやかに立ち上がる器形を呈する。体部の施文は61・62が条痕文、63～65はLR斜繩文が施される。66・67は7～8群の粗製深鉢である。67は口縁部の内面に段をもつ。体部はともにLR斜繩文が施される。68は3～8群の粗製深鉢である。口縁部および底部は欠損し体部のみであるが、口縁部にかけて内湾する器形を呈する。体部はLR斜繩文が施され、二つの並んだ穿孔が認められる。

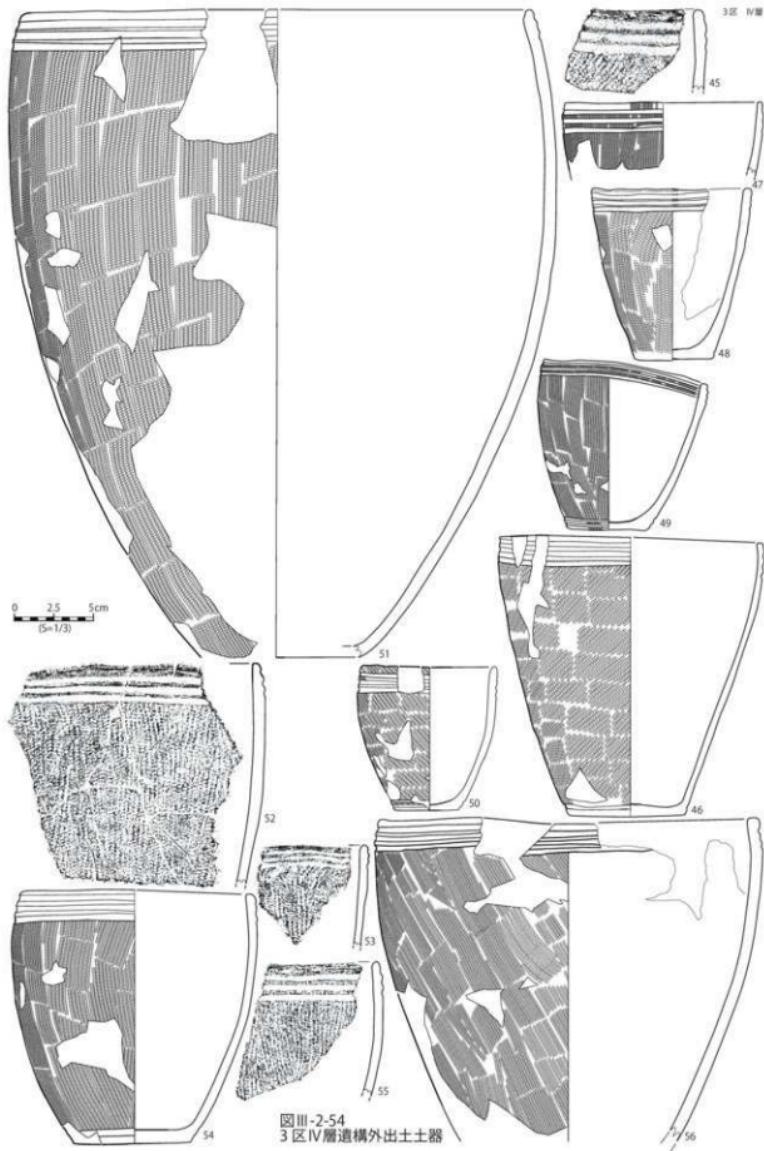
69～72は9群の精製深鉢で、大平段階にある。69は台付深鉢であり、口縁部にカルデラ状山形突起とB突起が等間隔で配置される。体上部に山形突起に沿う沈線と、平行沈線間に横一列に連続する結節、凸字状工字文が施される。70・71のうち70は、口縁部にゆるやかな三角形を成す山形突起を有し、71は平線口縁である。体上部の平行沈線間に横一列に連続する粘土粒による結節と凸字状工字文が施される。72は体上部に沈線による区切りの結節と凸字状工字文が施される。73は時期不明の半精製深鉢である。口縁上部に2本の横位沈線が施され、体部は不規則な刻みが認められる。

74・75は2a群の精製鉢である。74は体上部に横位沈線に挟まれた帶繩文が施される。75は口

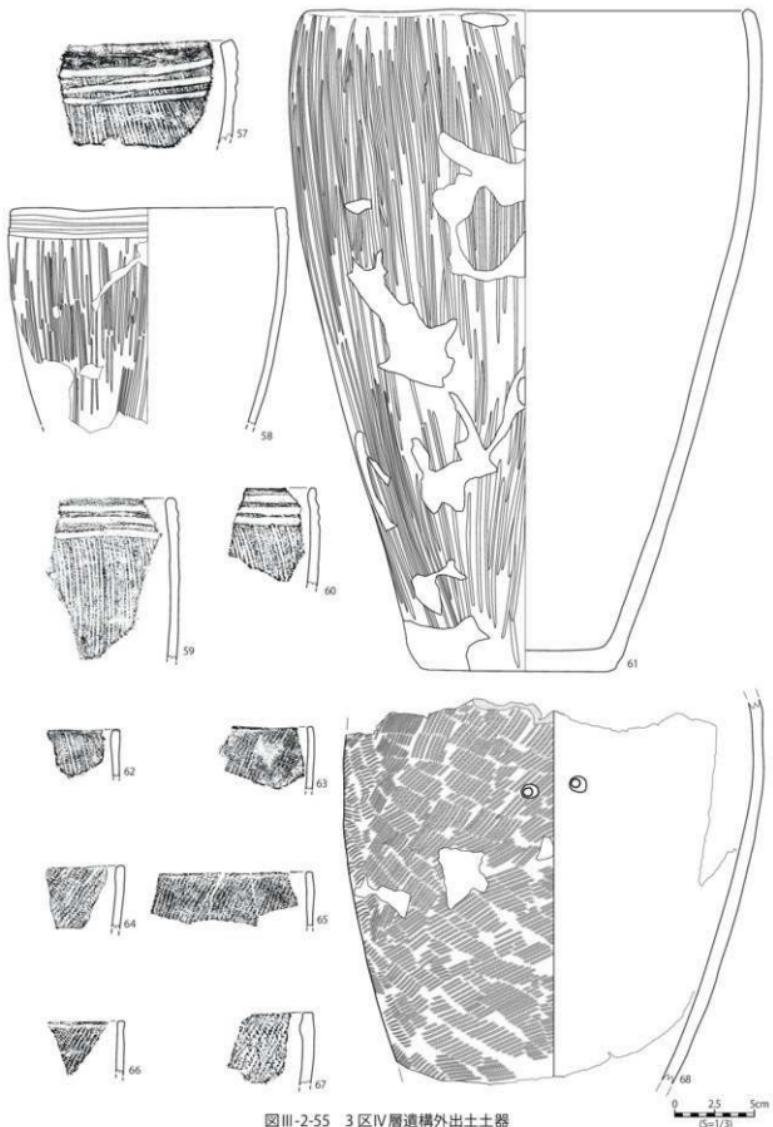
3区 N層



图III-2-53 3区IV層遺構外出土土器



3区 IV層



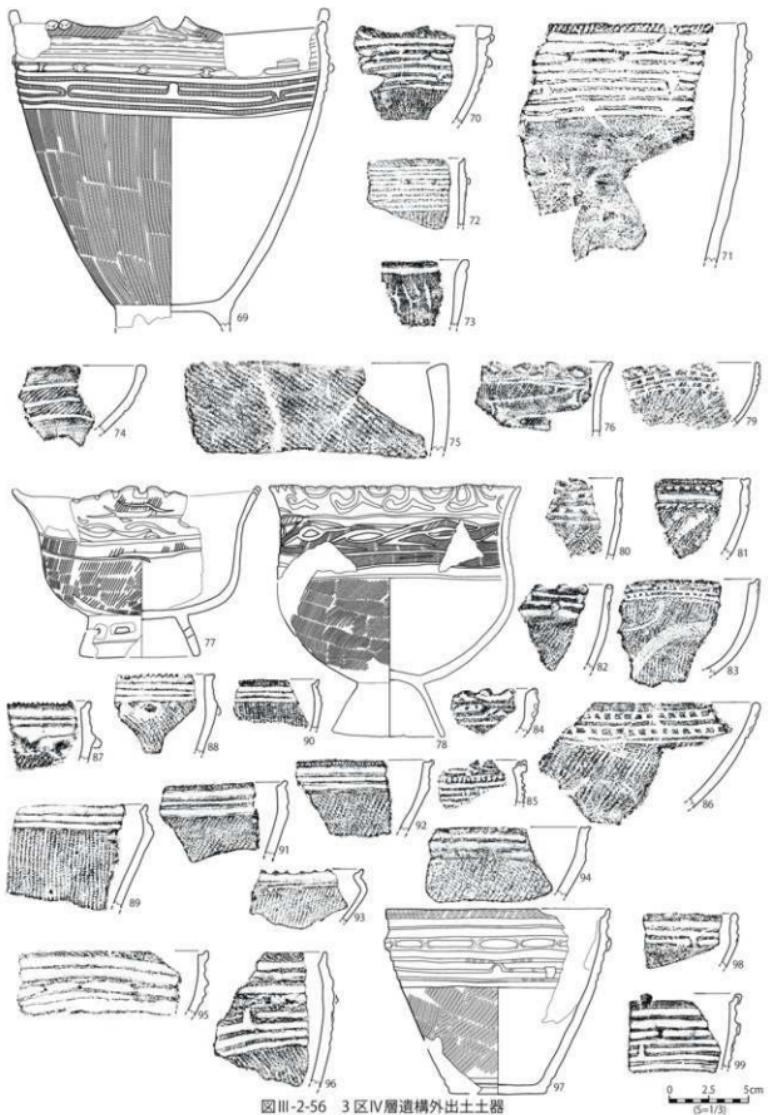
図III-2-55 3区IV層層構外出土土器

縁部が厚く整形され、RL斜縄文が施される。76は3群の精製鉢である。波状口縁を呈し、突起と連動して列点文が連続する。体部は入組帶縄文が施される。77・78は4群の精製台付鉢である。77底部から外反しながら立ち上がる器形を呈する。口縁部に頂部に刻みが入る山形突起を有し、体上部に入組三叉文が施される。78は体部から内湾気味に立ち上がり口縁が外反する。口縁部は刻みが連続する波状口縁を呈し、刻みと連動した孤線が連続する。体上部は入組三叉文が横に連続する。79～82は5群の精製鉢である。79は口唇部に左斜の刻みが連続し、体上部に二段の列点文が施される。80は口縁部に中間をならしたB突起が連続し、突起に連動したノの字状文が巡る。体部は二段の列点文が施される。81は体上部に横位沈線と列点文が施される。82は波状口縁を呈し、体上部に列点文が巡る。83～86は6群の精製鉢である。83は口縁上部に簡略化された羊歯状文が巡り、体部に雲形文が施される。84は波状口縁を呈し、体部に羊歯状文が施される。85は口縁部にB突起が単独で配置され、口縁上部に突起に沿う沈線、体部は簡略化された羊歯状文が施される。86は口縁上部の沈線間に二段の列点文が巡る。87～94は7群の鉢である。87・88は精製であり、口唇部に刻みが巡り、口縁上部に横位沈線および沈線下にB突起が配置される。89～94は半精製であり、89～93は肩部に屈曲点を有し、93は波状口縁を呈する。89・90～93は口唇部に刻みが巡る。89～94の口縁上部には横位沈線が施される。

95～110は8群の鉢である。95～98は精製で平縁口縁を呈する。95は口縁上部の平行沈線間に結節が連続する。96は口縁上部に結節、体上部に凸字状工字文が施される。97は口縁上部の平行沈線間に粘土粒による結節が横に連続し、体上部は凸字状工字文が施される。98は口縁上部に凸字状工字文が施される。99～108は精製で山形突起を有する。99は体部に沈線で区切る工字文が施される。100は口縁部にB突起とカルデラ状山形突起が等間隔で配置され、口縁上部に山形突起に沿う沈線および平行沈線間に横に連続する粘土粒の結節、体部に凸字状工字文が施される。101は口縁部に中間をならしたB突起が配置され、口縁上部の沈線間に刻目が連続する。102は底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる器形を呈する。口縁部に中間をならしたB突起が配置される。口縁上部に多重横位沈線と沈線間に結節が施される。103は口縁部に中間をならしたB突起が配置され、口縁上部に平行沈線間に結節を有する。体部は矢羽状文が施される。104・105は口縁部に中間をならしたB突起が配置され、口縁上部の平行沈線間に結節、体部に凸字状工字文が施される。106は台付鉢で口縁部にB突起とカルデラ状山形突起が等間隔で配置される。口縁上部の平行沈線間に粘土粒による二段の結節が上下交互に連続し、体部は凸字状工字文が施される。107は台付鉢で口縁部に対を成すやかな山形突起が配置される。口縁上部に横位沈線および沈線間に粘土粒による結節をもつ。体上部は矢羽状文の開いた側が向かい合い横に連続する。108は口縁部に対を成すやかな山形突起が配置され、口縁内面に突起に沿う沈線が巡る。口縁上部に結節をもち、体部は沈線により区切られる工字文が施される。109・110は半精製であり、109は底部からゆるやかに立ち上がる器形を呈する。ともに口縁上部は横位沈線が巡る。111は7～8群の半精製鉢である。肩部がややくびれ1本の横位沈線が施される。112は3～8群の粗製鉢で無文である。

113～119は9群の精製鉢である。113～118は大平段階の土器であり、113は口縁部にB突起と対の突起が配置される。対の突起の頂部は中央に刻みが入り両側を連続で刺突する。口縁上部に列点文、平行沈線間に粘土粒による結節をもつ。体上部に連繫入組文と体下部は多重横位沈線が施される。114は口縁部に対を成す山形突起を有し、体部は沈線で区切られた工字文が施される。115

3区 IV層



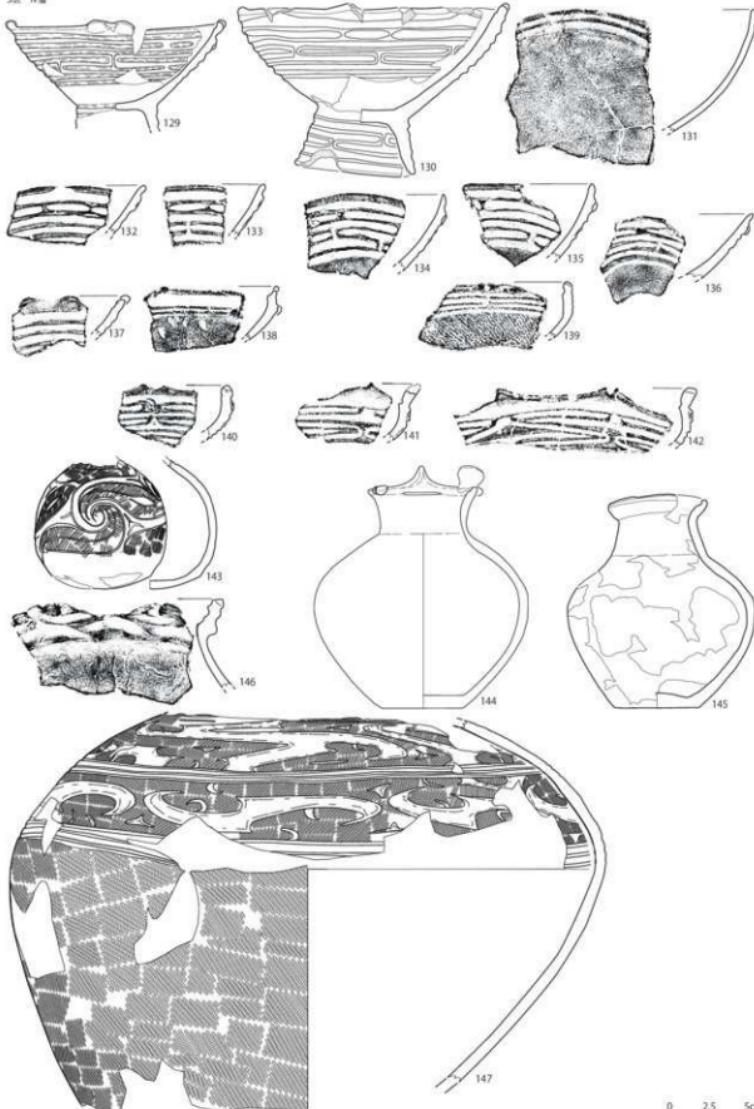
图III-2-56 3区IV層遺構外出土器

3区・IV層



図III-2-57 3区IV層遺構外出土土器

3区 N層



图III-2-58 3区IV層遺構外出土土器

0 2.5 5cm
(S=1/3)

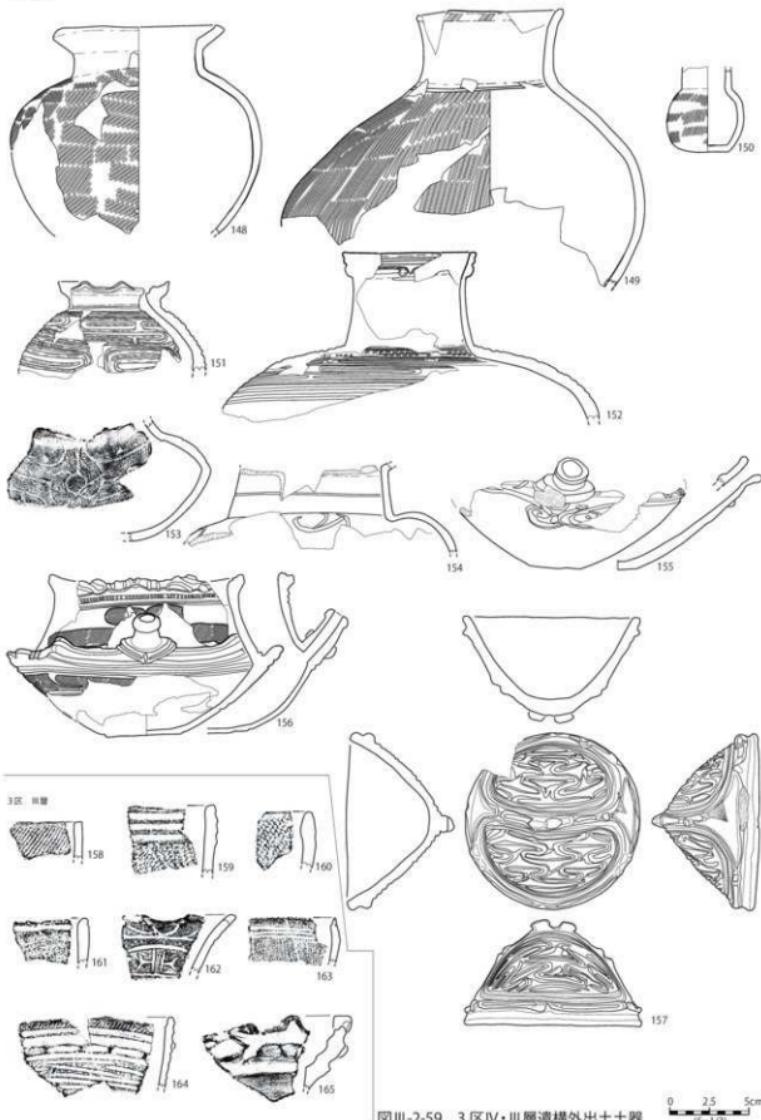
は口縁部に大型化した突起が配置される。口縁上部は突起に沿う沈線が施される。116は体部に連繫入組文が施される。117・118は口縁上部の平行沈線間に結節をもち体部は凸字状および沈線で区切る工字文が施される。119は大洞A2式の台付鉢であり、底部からゆるやかに立ち上がり口縁部が軽く外反する。台部が欠損したのち、底面をならし鉢として再利用している。口縁部は頂部が凹む山形突起が等間隔で配置され、口縁上部は無文帶およびその下部は平行沈線間を沈線で区切る結節をもつ。体上部は連繫入組文、体下部は多重横位沈線が底部まで施される。

120は2aの精製浅鉢である。口縁部は厚く整形され、刻目が横に連続する。体部は鉤状沈線の間が磨消され、RL斜縄文が施される。121～139は8群の浅鉢である。121～130は精製であり、121は口縁上部に横位沈線と沈線間に区切る結節が施される。122は台付浅鉢であり、口縁上部に平行沈線間に粘土粒による結節を有する。体部と台部は多重横位沈線が施される。123・124は口縁上部の平行沈線間に粘土粒による結節を有する。125・126は体部に流水状工字文が施される。127・128は口縁部にゆるやかな三角形の山形突起が配置され、口縁上部は横位沈線が巡る。129・130は台付浅鉢で、129は口縁部の四方にB突起、130は山形突起が配置される。ともに体部は流水状工字文が施され、130は台部まで及ぶ。131～138は精製浅鉢で赤彩が認められる。131は口縁上部に2本の横位沈線が巡り、体部は磨かれている。132は口縁上部の平行沈線間に結節を有する。133～136は平縁口縁であり口縁上部の平行沈線間に結節を有し、体上部に流水状工字文が施される。137・138は口縁部にゆるやかな山形突起が配置される。137は口縁上部に横位沈線、138は平行沈線間に結節が施される。139は半精製であり、肩部に屈曲点をもち口縁部が直立する。口縁上部に凸字状工字文が施される。

140は9群の精製浅鉢である。大洞A2式にあたり、140はゆるやかな三角形の山形突起を有する。口縁上部は四字文が施される。141・142は10群の精製浅鉢である。口縁部に頂部が凹む山形突起を有し、口縁上部に変形工字文が施される。

143は4群の精製壺である。球胴状の器形を呈し、体部に入組帶縄文が施される。144～146は7群の壺である。144は精製であり、肩部がなで肩の器形を呈する。口縁部に山形突起と口唇外部にB突起が配置され、体部は無文である。145・146は赤彩が認められる。145は肩部がなで肩で底部は上げ底を呈する。平縁口縁で体部は無文である。146は口縁部に中に刻みが入るB突起とゆるやかな三角形の山形突起が配置される。147・148は7a群の壺である。147は精製であり、体部上半に雲形文とLR斜縄文が施される。横位沈線により二段に区画され、上段に連続する弧線による区画文C、下段に上下それぞれの向きのC字文が接合し1つの文様となり、小型のノの字状文が付加される配置文Dが施される。体部下半はRL斜縄文が施される。148は粗製であり、肩部がなで肩で頸部は短く口縁部が外反する器形を呈する。体部はLR斜縄文が施される。149は6～7群の粗製壺である。肩部はなで肩で口縁部がゆるやかに外反する。頸部に横位沈線が巡り、体部はLR縦縄文が施される。150は3～8群の粗製壺である。肩部がなで肩で小型の器形を呈する。体部はLR斜縄文が施される。151・152は9群の精製壺である。大洞A2式にあたり、151は底部が欠損しているが、肩部がなで肩で球胴状に近い器形を呈する。口縁部に対を成す山形突起を有し、突起に沿う沈線が施される。体部は流水状工字文と凸字状工字文が組合った文様が施される。152は平縁口縁で底部が欠損しているが肩部が張り出す器形を呈する。口縁上部の沈線間に突起を有する。体上部に横位沈線と沈線間に刻目が連続する。体部は工字文と四字文が組合った文様が施される。153は3群の精

3区・IV層



图III-2-59 3区IV・III層遺構出土土器

0 2.5 5cm
(S=1/3)

製注口で体部に入組帶縄文が施される。154は4群の精製注口であり、体部に弧状沈線が施される。155は5群の精製注口であり、注口部直下の体部にC字状の弧状沈線が施される。156は7a群の精製注口であり、肩部を境に上部と下部の比率がおよそ1:1で、肩部が張り出す器形を呈する。口縁部は中間に刻みが入るB突起と頂部に刻みが入る山形突起が交互に連続し、突起間に縦位沈線が2本施される。口縁上部は沈線間に刻目が横に連続し、体上部に配置文Bに相当する雲形文が施される。肩部は口縁部と同様の突起および沈線となる。注口部は根本が菱形状に整形され、上端下端の刻みで途切れるように沈線が巡る。体下部は欠損部分が多いが、配置文Dが間延びした雲形文と考えられる。157は9群の精製蓋である。大洞A2式にあたる。底部から頂部にかけて顯著な屈曲を持たずやかな立ち上がる器形を呈する。底縁部に施文はなく断面は丸みを帯びる。内面は施文が無く磨かれている。底縁上部を一周するように隆帯が施され、隆帯上を沈線が巡り沈線間に粘土粒による結節が六角形を成すように配置される。六角形を二分割する位置で底縁上部の隆帯が頂部に向かい伸び、根元は二辺が弧状の三角形を呈し、内側は膨出される。頂部は中間をならしたB突起が配置され、両側に小ぶりのB突起を一つづつ有する。突起間は沈線が施される。隆帯により二分割された体面は、左右非対称の楕円形となり、内側に歪なネガ文様の凸字状工字文が不規則に充填される。

III層（図III-2-59）

158は3～5群の粗製深鉢である。体部にLR斜縄文が施される。159・160は8群の深鉢である。159は半精製であり、体上部に3本の横位沈線が巡り、RL斜縄文が施される。160は粗製であり、口縁内面に段をもち、体部にLR斜縄文が施される。161は7～8群の粗製深鉢であり、口縁部に1本の横位沈線が巡る。162は4群の精製鉢である。頂部に中間をならした突起を有し、口縁上部に二重の弧状沈線が巡る。体上部は向き合う山形三叉文が横に連続する。163は7群の精製鉢である。口唇部と口縁上部に刻みが横に連続し、その下に3本の横位沈線が巡る。体部はRL縦縄文が施される。164は8群の精製鉢である。口縁上部は平行沈線間に粘土粒による結節をもち、体部は開いた側が向かい合い横に連続する矢羽状文が施される。165は8群の精製壺である。口縁部に中間をならしたB突起と台形状を呈する山形突起が配置される。口縁上部は突起に沿う沈線と横位沈線が巡る。

ii. 石器・石製品

石器・剥片・礫・石製品は遺構内外から6,854点、96,084g出土した。このうち、65点を図化した(図III-2-60～63)。遺構内出土の石器はほぼ全て古代の遺構への流入である。図化できなかった石器は観察表と写真において報告する。共伴土器から帰属時期は縄文時代晚期後葉が主体と考えられる。各種出土石器の器種分類および細分についてはH28年度報告に準じる。出土した石器のうち剥片石器は尖頭器・石鏃・石錐・小型石錐・石匙・石鑿・磨製石斧など119点、スクレイバー・小型石錐などの不定形石器が381点、敲石・石皿・玉砥石などの礫石器は254点である。石製品は石棒・岩版・有孔石製品が8点である。玉類は68点確認した。

剥片定型石器は尖頭器6点、石鏃69点、石錐11点、石匙9点、石鑿19点である。剥片不定形石器はスクレイバー16点、小型石錐248点である。礫石器は磨石・敲石類234点、石皿17点、玉砥石3点が確認された。なお、計数には欠片を含む。

石器製作にかかる核石・剥片は3,999点、34,298.8gである。以下、図化資料の特徴を述べる。

3～11は石鎌である。3～10は凸基有茎で11は凹基無茎である。石材は珪質頁岩が主体でほかに黒耀石、メノウ、流紋岩がみられる。4・7・10は基部にアスファルトが付着する。29～32は石錐で石材は珪質頁岩である。29は頭部に梢円状の整形がみられ、30・31は粗く整形される。32は突起状のつまみが整形される。29～32は錐部先端に摩滅がみられる。

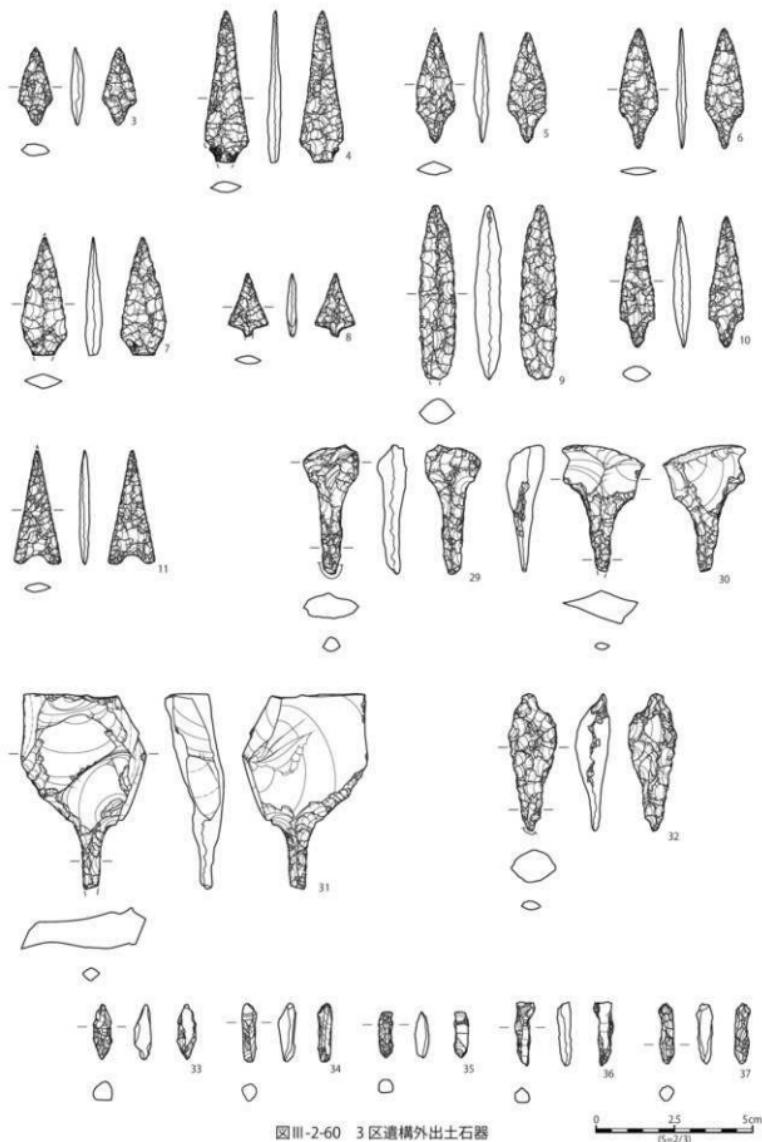
33～37は小型石錐である。石材はメノウで棒状を呈し、長さはおおよそ1～3cm以内に収まる。42・43は石匙で42は縦型、43は横型を呈する。石材は珪質頁岩でつまみ部を有する。43はつまみ部にアスファルトが付着し、刃部に光沢がある。44・45・47・48～50は石鎌で石材は珪質頁岩である。44・45は上端が尖り下方が広がる尖形で、47・48は側縁がえぐられ、刃部が広がる斧形、50は台形で上端がやや広がる。47は上端にアスファルトが付着し、刃部に光沢がある。52・53はスクレイバーで石材は珪質頁岩である。52は縦型剝片の片側縁と下辺に、53は縦型剝片の両側縁に刃部を有する。55～57は磨製石斧である。石材は緑色岩で55～57は刃部のみ、56は完形である。定角式で連続敲打、あるいは研磨によって全体形が整えられる。58は玉砥石である。石材は砂岩で表裏に溝状の研ぎ面がみられる。59・60は石皿片である。56は安山岩で板状を呈する。片面に赤色顔料が残存する。57は砂岩で片面に凹部が作り出される。62は石棒である。石材は砂岩で頭部が形成される。63は有孔石製品である。石材は頁岩で中央が穿孔される。兩垂石を利用したものである。64は岩版である。一部欠損しているが形状は台形状で角は面取りされ梢円体を呈する。上下の端は角状に突き出しており、片面の四方の角と側面中央に4～5本の半円状の沈刻線が施される。反対側の片面にはネガ文様の流水状工字文が一面に施される。石質は軟質凝灰岩である。

65～93は玉で石質は緑色凝灰岩である。H28年度報告に準じて分類し、穿孔された完成品(IV類)を抽出した。65～91は丸玉である。中央が穿孔され、多くが両面を研磨し平坦に整形される。ほかは片面整形、整形無しがみられる。92・93は勾玉である。92は整形なしで93は全面が研磨により整形される。88・89・93は古代の遺構から出土したが、流入によるものと考えられる。

Ⅲ. 土偶・土製品

土偶6点、耳飾1点、環状土製品1点、ミニチュア土器2点を図化した(図III-2-64)。

1・2は土偶頭部である。1の顔は眉毛・目・鼻・口の部位が粘土貼付の隆帯で表現され、目と口は中央部が凹み、眉毛にLR斜縞文が部分的に施される。鼻腔は刺突により表現される。額の頂部が窪み後頭部へ向かい伸びる。後頭部は結髪と思われる表現がT字形に突出する。結髪部は形状に沿って横へ伸び頂部で上向きに曲がる沈線が施される。背面は縁辺がやや盛り上がり、縁に沿う横位沈線が施され、中央に粘土紐による隆帯を有する。隆帯の脇は穿孔されており、反対側は欠損のため不明だが、同様に穿孔されていた可能性が考えられる。頸部は粘土紐による隆帯で表現され、刻みが横に連続する。頸部の欠損部から、体部が中空であること、角度から頭部が体部より前に出る形状の土偶であると考えられる。2は中実土偶で眉毛・目・鼻・口が粘土貼付により表現される。目と口は中央部が凹み、鼻腔は刺突される。頭頂部が凹み短沈線状に後頭部へ伸びる。側頭部にも短沈線状の凹みが施される。後頭部下方に山の字状の突起を有し、頂部に横に連続する刻みが施される。3は中空土偶の下腹部である。前面の腹部に横位沈線と股部に頂点が向かう三角状の彫去と弧状沈線が施される。背面は刺突による穿孔がみられる。4は中実土偶の腕部片である。無文であるが表面が調整されている。5は足部で残存部に中空の痕跡が確認できる。無文で表面が調整されている。足部底面の形状が



図III-2-60 3区造構外出土石器

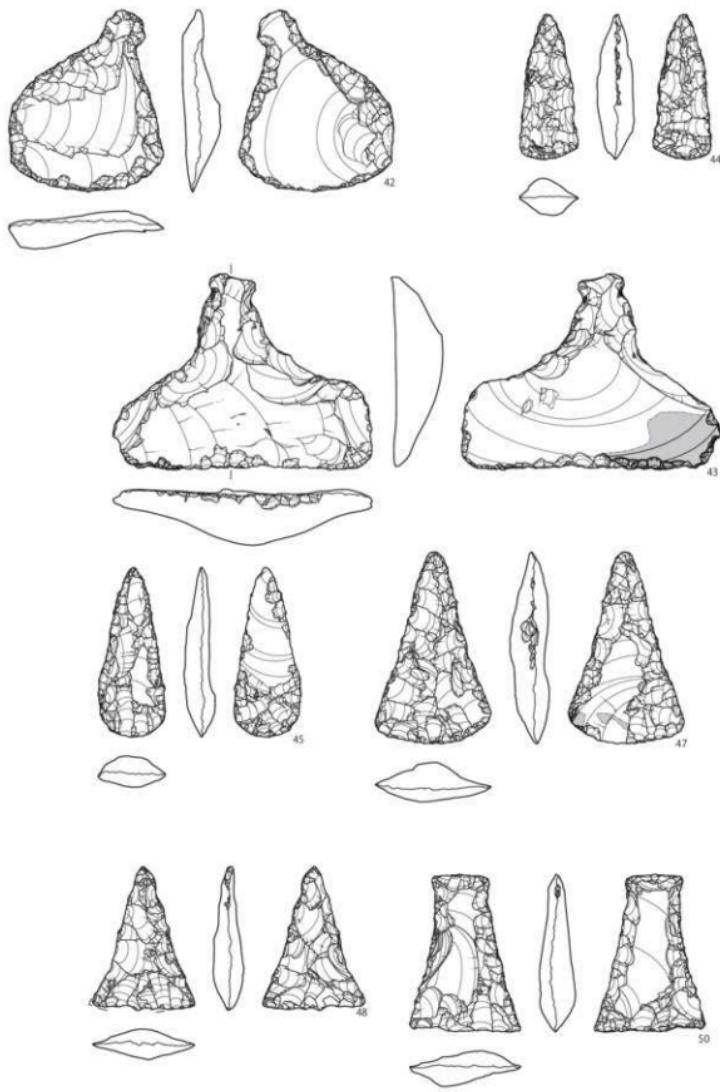
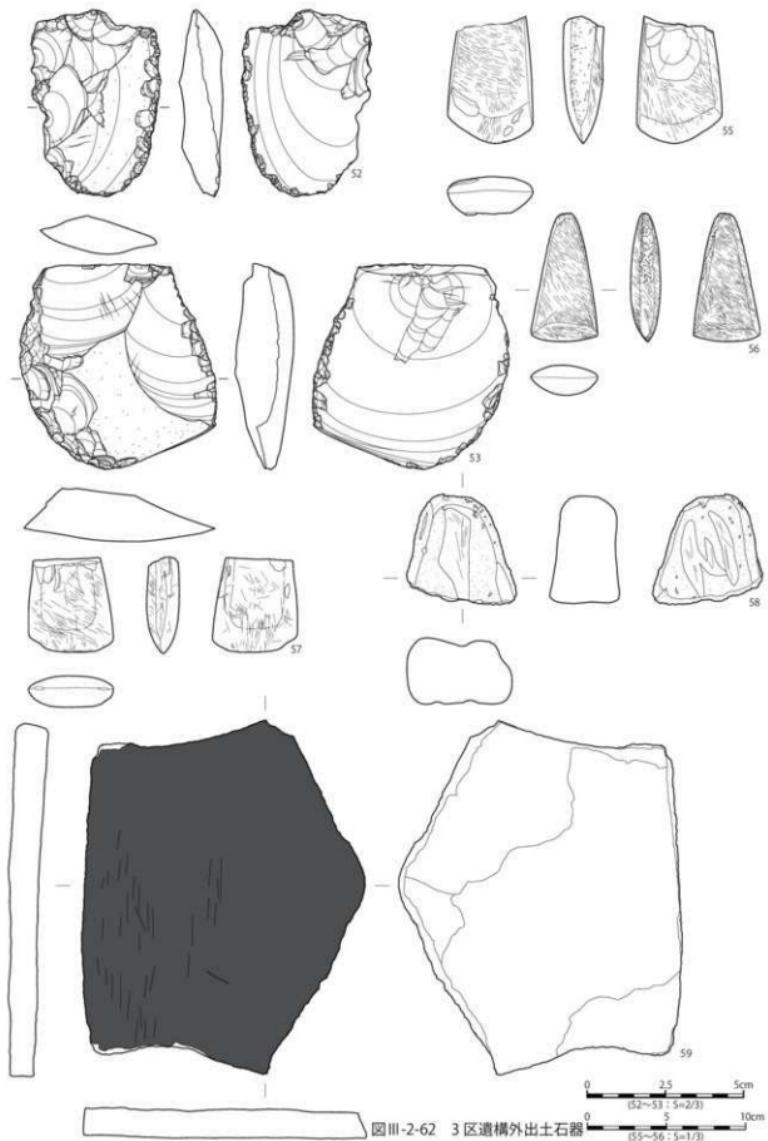
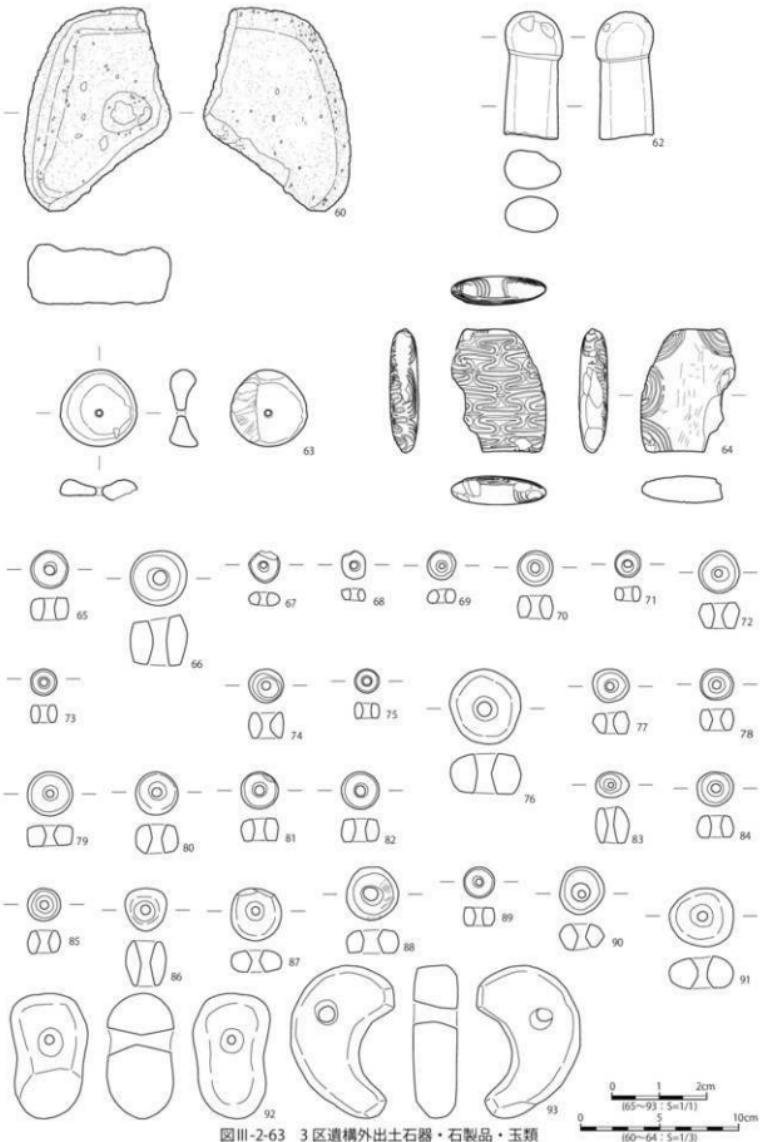


圖 III-2-61 3 区造構外出土石器

0 2.5 5cm
(5=2/3)

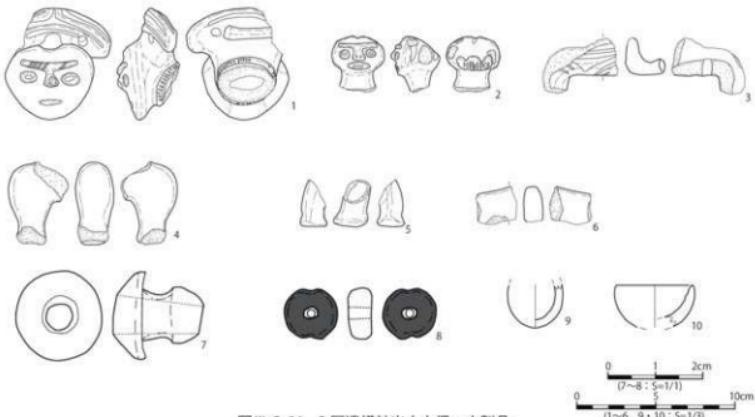




図III-2-63 3区遺構外出土石器・石製品・玉類

ら自立する土偶と考えられる。6は無文で表面が調整されており、扁平な作りである。厚みが薄い一辺が、せり上がるようやや斜めになる形状から、X字形土偶の肩部であると考えられる。

7は耳飾である。片方が傘状に広がり、中央部がくびれる。中心が穿孔され傘状側の径が大きくなる。表面は調整されている。8は土玉で全面に赤彩が施される。中心が穿孔され、表裏の孔の径に差はない。側面の向かい合う二ヶ所に凹みが確認できる。9・10はミニチュア土器である。いずれも破片であり、9は壺の体部、10は浅鉢の口縁部である。ともに無文である。



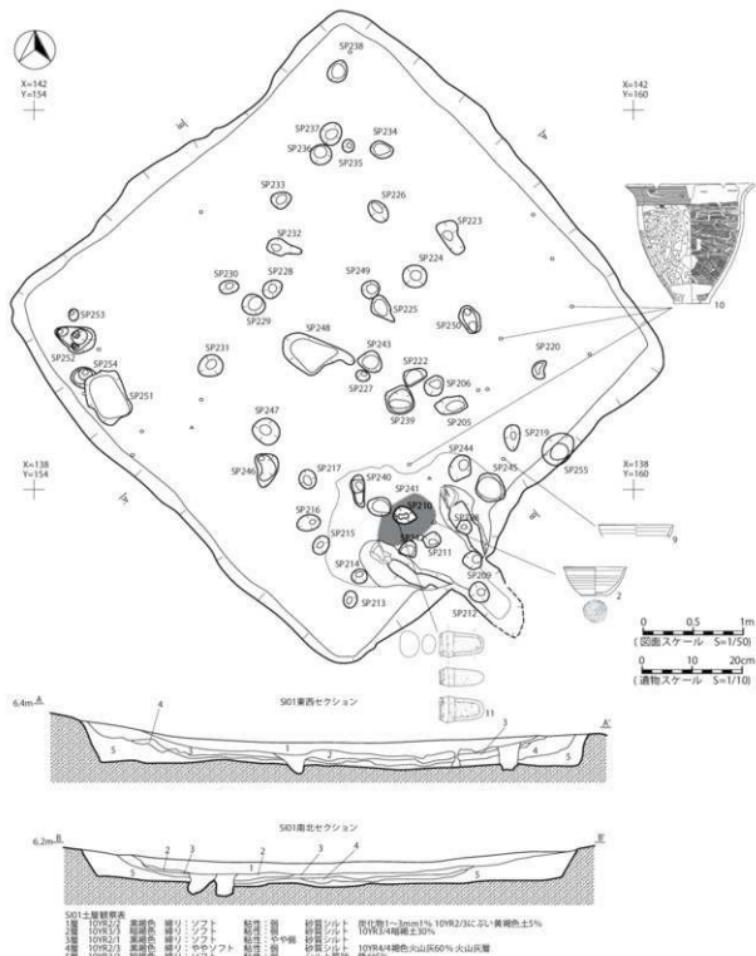
図III-2-64 3区遺構外出土土偶・土製品

第3節 古代の検出遺構と遺物

1. 3区

古代の遺構は3区から竪穴建物跡3棟、土坑1基、柱穴239基が検出された。

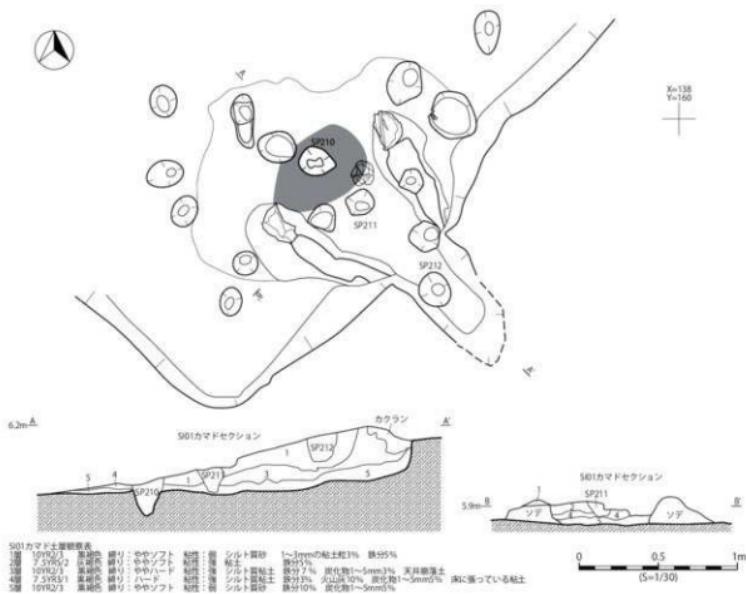
(1) 検出遺構



i. 積穴建物跡

第1号積穴建物跡 (SI01、図III-3-1)

【位置・確認】X = 138 ~ 144、Y = 158 ~ 160 に位置する。Ⅲ層において凹んだ状態で確認された。【重複】SP205・206・209・217・219・220・222・233・235～255より古い。【形状・規模】長



図III-3-2 SI01 カマド

軸 5.1 m、短軸 5 m、深さ 0.61 m の方形を呈する。床面積は 22.6 m² である。長軸方位は N138°-E である。【堆積土】5 層確認された。全体的にレンズ状の堆積を示しており、自然堆積の様相を呈する。覆土中位の 4 層からは降下火山灰（未分析であるが、肉眼観察により、白頭山・苦小牧火山灰（以下、[B-Tm] とする。）と推定される。）がレンズ状に堆積していることが確認された。【壁面・床面】貼床および壁面周溝は確認されなかった。【カマド】南東壁のやや西寄りに南東向で配置される（図III-3-2）。長軸方位は N138°-E である。半地下式の煙道が伴う。煙道は長軸 0.79 m、短軸 0.46 m、深さ 0.42 m を呈する。カマド両壁は構築材として白色粘土が用いられ、両袖部に安山岩の芯材が確認された。支脚に安山岩の石および石を覆うように环が使用されていた。カマドの改築は認められなかつた。【炉】無し。【柱穴・土坑】遺構に伴う明確な柱穴は確認されなかつた（図III-3-3・4）。【出土遺物】流れ込みによる縄文土器が 5,897.9 g、土師器は 1,505.4 g が確認された。そのうち縄文土器を除いた土師器 9 点、1,276 g を図化した（図III-3-5・6）。1～8 はロクロ成形の环であり、外面内

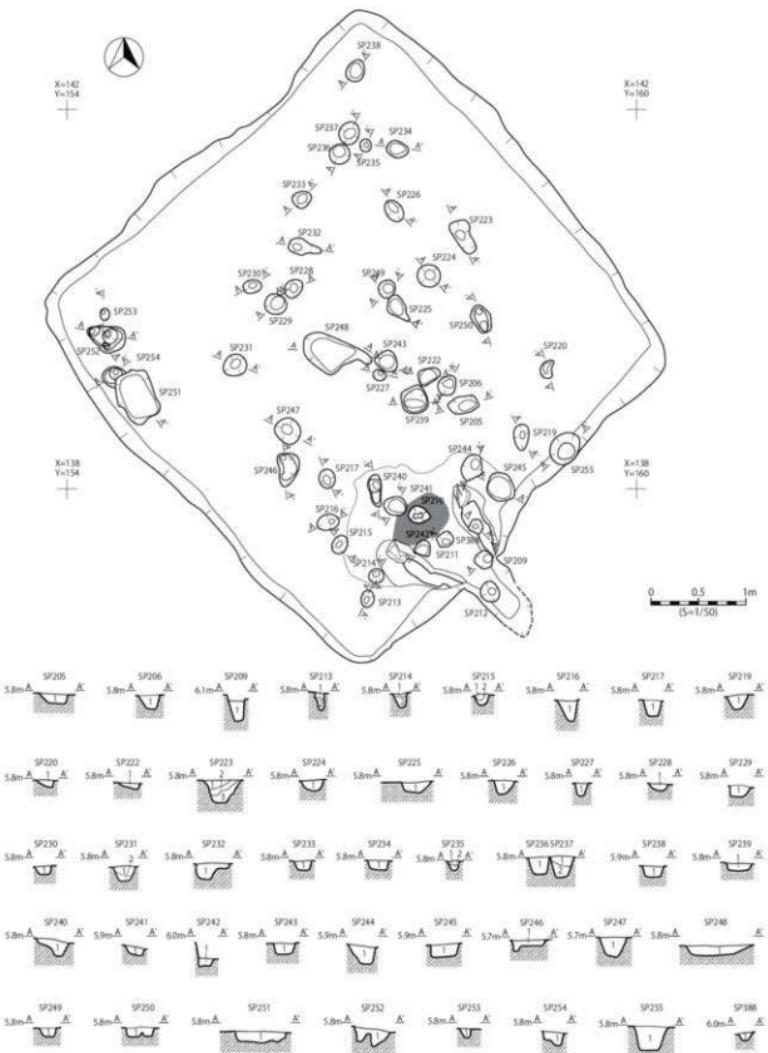
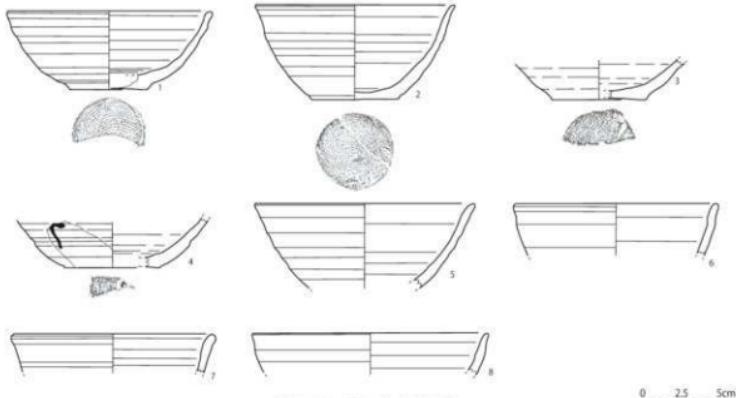


图 III-3-3 SP205·206·209·213~217·219~255·388

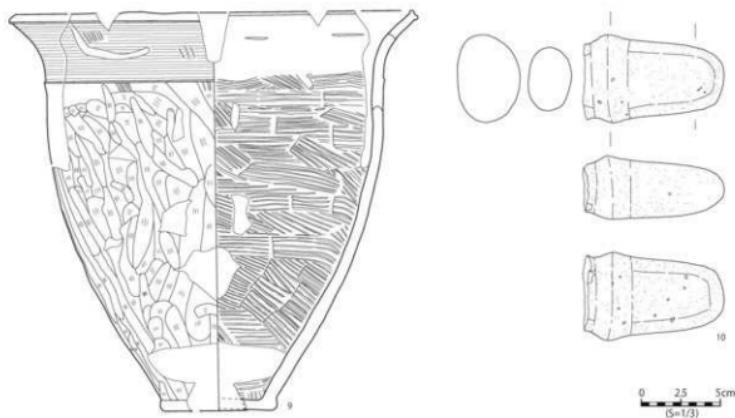
SP土層観察表										
SP205	10YR1/1	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	火山灰20% 粘分3%	SP232	10YR2/2	黒褐色	
SP206	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	火山灰10% 粘分3%	SP233	10YR2/2	黒褐色	
SP209	10YR2/2	黒褐色	砂利:ややハード	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP234	10YR2/2	黒褐色	
SP213	10YR2/1	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP235	10YR2/2	黒褐色	
SP214	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP236	10YR2/2	黒褐色	
SP215	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP237	10YR2/2	黒褐色	
SP216	10YR2/1	黒褐色	砂利:ややハード	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP237	1層	黒褐色	
SP217	10YR2/2	黒褐色	砂利:ややハード	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP237	10YR2/3	黒褐色	
SP219	10YR2/2	黒褐色	砂利:ややハード	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP238	10YR2/2	黒褐色	
SP220	10YR2/2	黒褐色	砂利:ややハード	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP239	10YR2/2	黒褐色	
SP222	10YR2/1	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP240	10YR2/2	黒褐色	
SP223	2層	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP241	10YR2/2	黒褐色
SP223	2層	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP242	10YR2/2	黒褐色
SP223	1層	10YR2/1	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP243	10YR2/3	黒褐色
SP224	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP244	10YR2/3	黒褐色	
SP225	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP245	10YR2/2	にじく黒褐色	
SP226	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP246	10YR2/2	黒褐色	
SP226	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP247	10YR2/2	黒褐色	
SP227	10YR2/1	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP248	10YR2/2	黒褐色	
SP229	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP249	10YR2/2	黒褐色	
SP229	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP250	10YR2/2	黒褐色	
SP230	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:やや硬	砂質シルト	粘分3%	SP251	10YR2/3	黒褐色	
SP231	1層	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP252	10YR2/2	黒褐色
SP231	2層	10YR2/2	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP253	10YR2/3	黒褐色
SP231	2層	10YR2/3	黒褐色	砂利:ソフト	粘性:硬	砂質シルト	粘分3%	SP254	10YR2/3	黒褐色
							SP255	10YR4/2	灰黒褐色	

図III-3-4 SP205・206・209・213～217・219～255・388 土層観察表

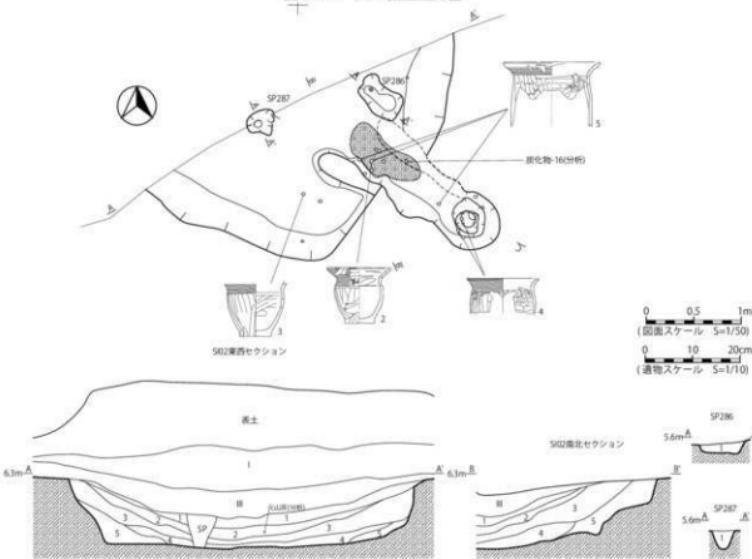
面ともにロクロナデ調整が施される。1～4の底面は回転糸切痕が確認できる。1は底部からゆるやかに立ち上がる。2は塊状の器形を呈し、ゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。3・4は环の底部で、ともにゆるやかに立ち上がる器形を呈するとみられる。5～8は环の口縁部から体部にかけて残存する。器形は、5はゆるやかに立ち上がり口縁部がわずかに外反する。6はゆるやかに立ち上がり、口縁部で軽く屈曲する。8は口縁部がわずかに外反し、段をもつ。5～7は胎土に砂粒を含まず、水簾した胎土を使用していると考えられる。また6は石英が含まれている。8はやや内湾しながら立ち上がり、わずかに外反する。口縁内面に段が形成される。9は甕で底部から口縁部まで残存する。輪積成形とみられる。口径と比して底径が小さく、底部から外側へ広がるように立ち上がり、口縁部は屈曲して外反する器形を呈するといった、擦文土器第V類に類似した器形である（青森県史編さん考古部会 2005）。口唇部形態は端部が面取りされ内面をつまみだすように若干T字状となる。口縁部はヨコナデ調整がみられ、体部外面は主に縦位のヘラナデ調整、内面は主に横位のハケメ調整が施される。10はカマド火床面から出土した縄文時代の独鉛石である。遺物包含層から



図III-3-5 SI01出土土器



図III-3-6 SI01出土土師器

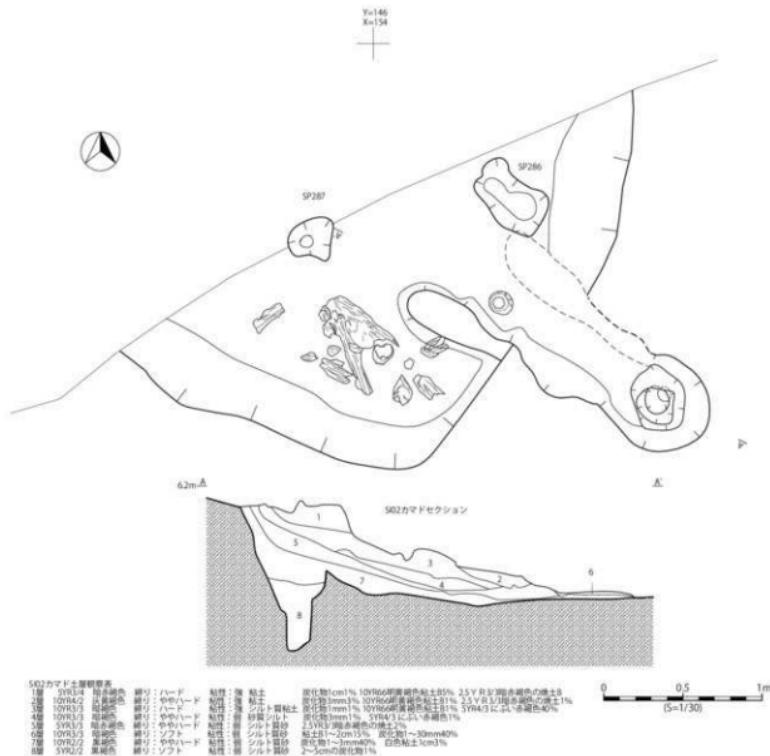


図III-3-7 SI02 SP286・287

SI02土壤剖面表
 1層 T09Y2-2風化色 繊り：ややハード 組成：砂質シルト 濃度：3% 塩化物3mm
 2層 T09Y2-3風化色 繊り：ややハード 組成：砂質シルト 濃度：5% 塩化物5mm
 3層 T09Y2-3風化色 繊り：ややソフト 組成：砂質シルト 濃度：5% 塩化物5mm
 4層 T09Y2-3風化色 繊り：ソフト 組成：砂質シルト 濃度：5% 塩化物5mm
 5層 T09Y2-4風化色 繊り：ソフト 組成：砂質シルト 濃度：5% 塩化物5mm
 土質：風化物3mm

SI02土壤剖面表
 SP286 T09Y2-2 風化色 繊り：ハード 組成：砂質シルト 濃度：0.5-3cm風化物5%
 SP287 T09Y2-3 風化色 繊り：ややハード 組成：砂質シルト 濃度：0.5-3cm風化物5%

の流れ込みと考えられるが、出土位置が特徴的なため図化した。【小結】床面出土の土師器から、10世紀前半頃の竪穴建物跡と考えられる。後述する SI02 および SI03 より新しく、3棟の中で建物の規模は最も大きい。覆土中位の火山灰降下以前に廃棄されたと考えられる。また、火山灰層までの覆土が約 15 ~ 20cm と薄い堆積状況であるため、建物廃絶後から火山灰の降下前までの期間は安定した気候条件であったと推測される。



図III-3-8 SI02 カマド

第2号竪穴建物 (SI02、図III-3-7)

【位置・確認】X = 144 ~ 146、Y = 154 ~ 156 に位置する。Ⅲ層で確認された。遺構のおよそ 1 / 2 の北～北東側にかけて調査区外のため未調査。【重複】無し。【形状・規模】長軸 2.7 m、確認範囲で短軸 1.9 m、深さ 0.67 m である。約半分が調査区外のため、全体の形状は不明であるが、検出部分から隅丸方形と呈するとみられる。床面積は確認範囲で 2.4 m²、長軸方位は N121°-E である。

【堆積土】5層確認された。自然堆積の様相を呈する。覆土中位の2層からは降下火山灰（B-Tm）が部分的にレンズ状に堆積していることが確認された（「第4章1節」を参照）。【壁面・床面】貼床および壁面周溝は確認されなかった。【カマド】南東壁ほぼ中央に南東向きで配置される。（図III-3-8）長軸方位はN126°-Eである。半地下式の煙道が伴う。煙道は長軸1.2m、短軸0.45m、深さ0.59mを呈する。カマド両壁は構築材として白色粘土が用いられ、袖部はハの字状を呈し、芯材は土師器片が少量確認された。支脚に擦文土器の様相を呈する土師器の痕が使用されていた。煙出し部に深さ0.95mのピット状の掘り込みが確認された。火床面が確認されたが、軟質のため使用頻度は低いと考えられる。【炉】無し。【柱穴・土坑】SP286、SP287が確認された。【出土遺物】流れ込みによる縄文土器が2,694.3g、土師器は1,382.9gが確認された。そのうち縄文土器を除いた土師器5点、1,208gを図化した（図III-3-9）。1は非ロクロ成形の壺である。底部から口縁部までゆるやかに立ち上がる。口唇部は丸くやや膨らむ。体部中央に不明瞭な段をもち、内外面ともにミガキが施され、内面は黒色処理が認められる。2～5は非ロクロ成形の壺である。2はカマドの支脚として利用されていた。輪積製法で底部がくびれ、肩部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部はくの字状に屈曲したあとやや長めに外反する。口唇部は面取され内側がやや出っ張り、口唇上に1.5～2cm幅の連続する縦位沈線による刻みが等間隔で9ヶ所配置される。口縁部から肩部にかけてヨコナデが施され、胴部との境目がくの字状に角張る。頸部に判別不能の線刻が3単位確認できる。胴部は主に縦位のユビナデが施され、底面は支脚利用の影響により摩滅している。3は底部がくびれ、肩部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁部は欠損しているが、頸部の屈曲点から外反するものとみられる。頸部まで2と同様の器形を呈する。頸部はヨコナデが施され、胴部は縦位のユビナデが確認できる。



図III-3-9 S102 出土土師器

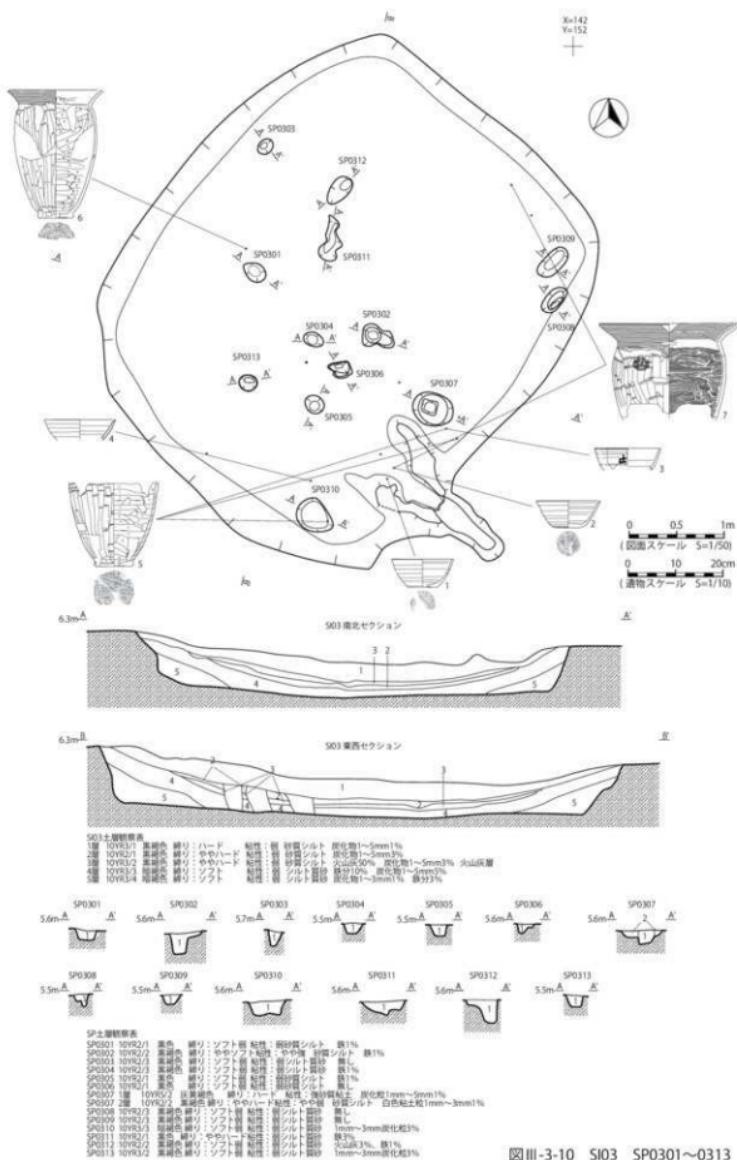
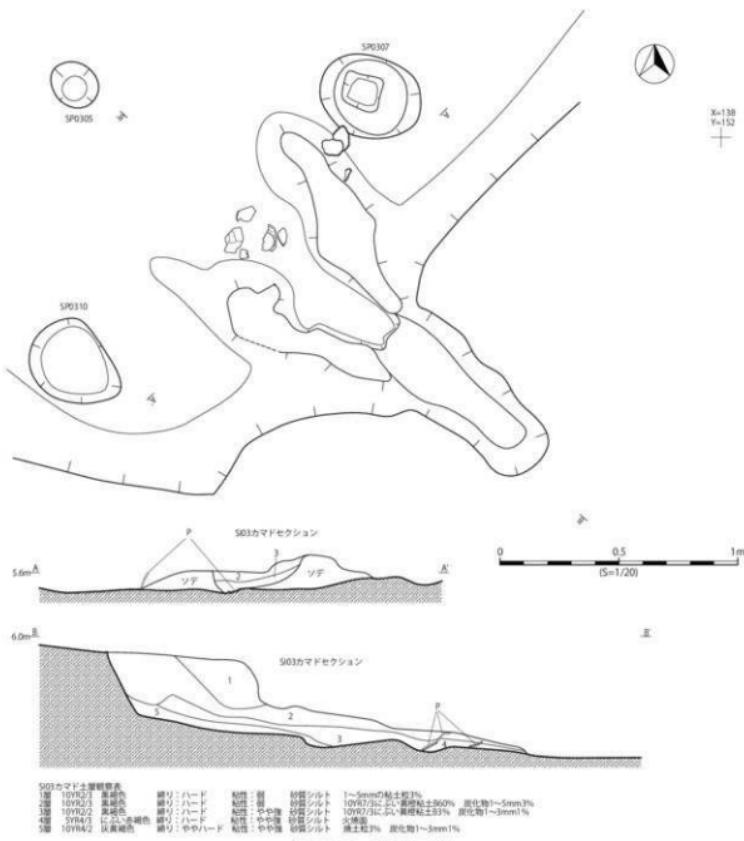
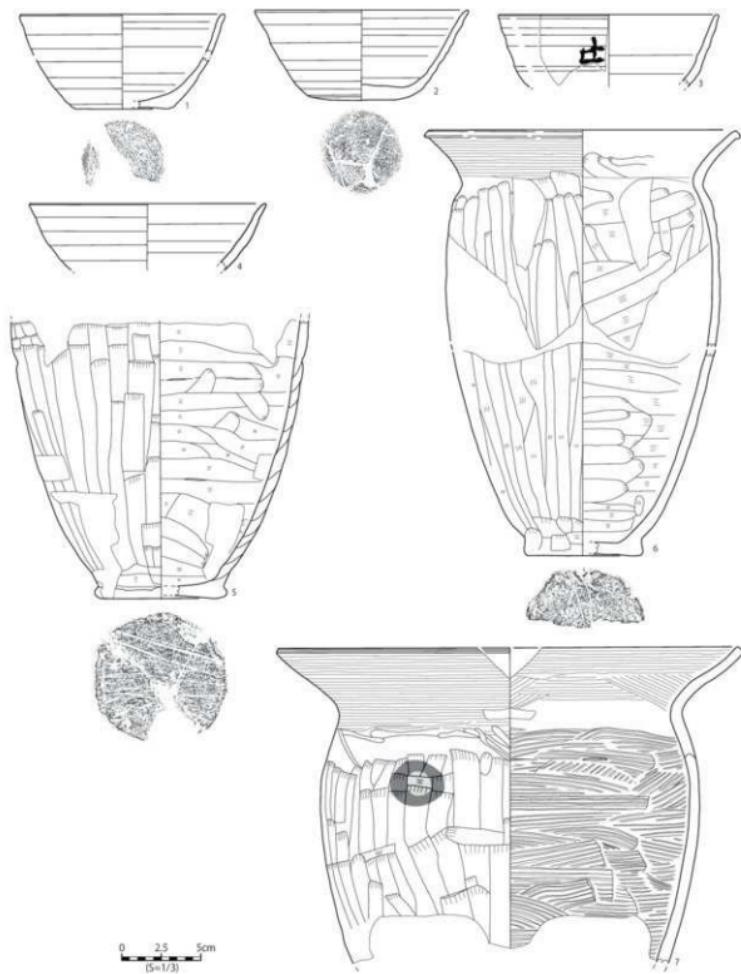


図 III-3-10 SI03 SP0301～0313



図III-3-11 SI03カマド

底面はナデ調整である。2・3は器形および施文から擦文土器の特徴がみられるが、胎土は土師器の特徴をもつ。4は胴部から内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。口縁部は面取され外側に段をもつ。頸部はヨコナデ、胴部は縦位のヘラナデにより調整され、内面は主に横位のヨコナデが施される。5は胴部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部はくの字状に屈曲し外反する。頸部に輪積痕が残る。頸部はヨコナデと一部ヘラナデが施され、胴部は縦位、内面は横位のユビナデにより調整される。【炭化物】床面で検出された炭化材は放射性炭素年代測定により、8世紀後半～9世紀後半の分析結果を得た。炭化材の自然科学分析についての詳細は第4章第4節で述べる。【小結】出土炭化材の自然科学分析の結果および出土土師器の時期は整合的であり、3区で検出された竪穴建物のなかで最も古く9世紀前半ころと考えられる。



図III-3-12 SI03 出土土師器

第3号堅穴建物（SI03）（図III-3-10）

【位置・確認】X = 138 ~ 142、Y = 148 ~ 152に位置する。Ⅲ層で確認された。【重複】SP0301 ~ 0313より古い。【形状・規模】長軸5m、短軸4.3m、深さ0.77mである。隅丸方形を呈する。

床面積は 15.7m^2 、長軸方位はN 133° -Eである。【堆積土】5層確認された。自然堆積の様相を呈する。覆土中位の3層からは降下火山灰(B-Tm)が部分的にレンズ状に堆積していることが確認された(「第4章1節」を参照)。【壁面・床面】貼床および壁面周溝は確認されなかった。【カマド】南東壁の南よりに南東向きで配置される(図III-3-11)。長軸方位はN 129° -Eである。半地下式の煙道が伴う。煙道は長軸 0.84m 、短軸 0.31m 、深さ 0.4m を呈する。カマド両壁は構築材として白色粘土が用いられ、袖部はハの字状を呈する。芯材は土師器片が少量確認され、支脚に环が使用されていた。【炉】無し。【柱穴・土坑】遺構に伴う明確な柱穴は確認されなかった。【出土遺物】流れ込みによる繩文土器が $4,655.3\text{g}$ 、土師器は $1,914.1\text{g}$ が確認された。そのうち繩文土器を除いた7点、 $1,642\text{g}$ を図化した(図III-3-12)。1~4はロクロ成形の环である。1・2は塊環状の器形を呈し、底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。3・4は底部が欠損しているが、3は底部からゆるやかに、4は底部からやや聞くように立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形がみてとれる。1~4は外面内面ともにロクロナデ調整が施される。1・2は底面に回転糸切痕、2は糸切後底部に調整がみられ、上底を呈する。3は胎土に砂粒がみられないため、水簸された胎土を使用していると考えられる。また、外面体部中程に墨書きが確認できるが、文字は判別不能である。5~7は非ロクロの甕である。5は口縁部が欠損しているが、底部がくびれをもち、口縁部にむかい直立気味に立ち上がる器形を呈する。内面に輪積痕が確認できる。胴部外面は縦位のヘラナデ調整、内面は横位のユビナデ調整が施され、底面はヘラナデ調整である。

6は図上復元により図示した。底部がくびれ、内湾しながら立ち上がり頸部がくの字状に屈曲し口縁部は外反する器形を呈する。口唇部は面取され角張り、外側に段を有する。頸部はヨコナデ調整、胴部外面は縦位のヘラナデ調整、内面に横位のユビナデ調整が施される。底面は木葉痕が確認でき、葉脈から広葉樹を用いていると考えられる。7は底部が欠損しており、胴部はやや膨らみ内湾しながら立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外



図III-3-13 S103 炭化材検出状況

反する。口唇部は面取され角張る。頸部はヨコナデ調整、胸部外面は主に縦位のヘラナデ調整、内面は横位のハケメ調整が施される。胸上部に円状のススが確認できる。【炭化物】床面で検出された炭化材から焼失住居であることが判明した(図III-3-13)。炭化材の残存状態が良好であった建築部材の垂木部を選定し樹種同定を行った。分析の結果、建築部材は広葉樹のハリギリであった。炭化材の自然科学分析の詳細については第4章第5節で述べる。焼失した建築部材は遺構の西側に集中して検出されたため、建物上部の柱、桁、垂木は東および北東方向に倒壊したと推測される。【小結】遺構覆土の堆積状況、出土遺物等の様相からSiO₂より新しく、SiO₁より古い9世紀中頃と考えられる。

ii. 土坑

第1901号土坑

(SK1901,

図III-3-14)

【位置・確認】X

= 140, Y = 136

~ 140 に位置する。Ⅲ層で検出された。遺構北西部分は遺調査区外にあり未調査である。【重複】SP299・302・

303・342・344・

361・363・364・

366・367・375

~ 377より古い。

【規模】長軸3m、確認範囲で短軸

2.2m、深さ0.8m、円形を呈する。

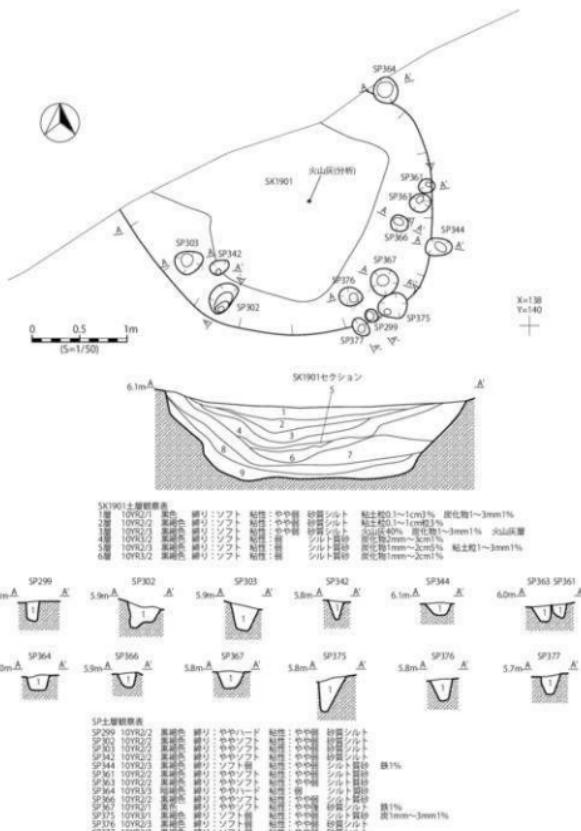
長軸方位はN60°-Eである。【堆積土】9層確認された。自然堆積の様相を呈する。3層

からは降下火山灰

(十和田a火山灰)

がレンズ状にやや

厚く堆積している

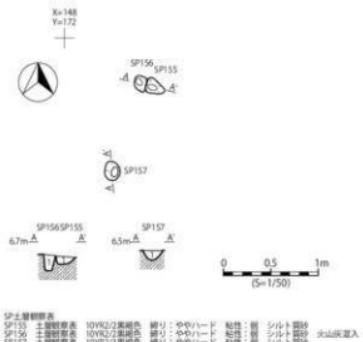


図III-3-14 SK1901
SP299・302・303・342・344・361・363・366・367・375~377

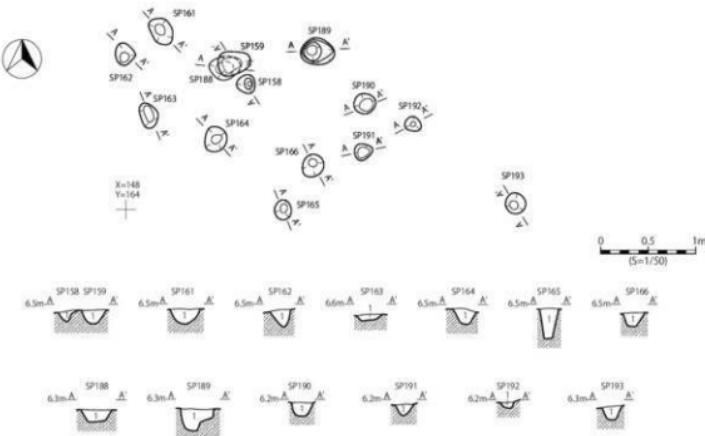
ことが確認された。火山灰については第4章第1節で詳細を述べる。【出土遺物】流れ込みによる縄文土器が727.2 g、その他の遺物は確認されなかった。【時期】火山灰（十和田a火山灰）降下以前と考えられる。柱穴については後述するが、土坑との関連は特に認められなかった。

Ⅲ. 柱穴

3区調査区で239基検出した（図III-3-15～20・22～25）。いずれも遺構確認面はⅢ層からの掘込みであるが、搅乱の影響により詳細は不明である。竪穴建物跡庵廬後の遺構であると考えられる。平面形は円形～橢円形を呈する。平面規模は平均すると長径0.25m、短径0.2m、深さは0.13mを測り、すべて小規模で深さも浅い。柱穴の覆土はすべて10世紀前半のB-Tm降下後のⅢ層が含まれることから、規模・堆積土などの様相から前回調査で確認された柱穴群と同様の平安時代以降の柱穴群である。柱穴群からの出土遺物は流れ込みによる縄文時代の土器や石器がほとんどであり、

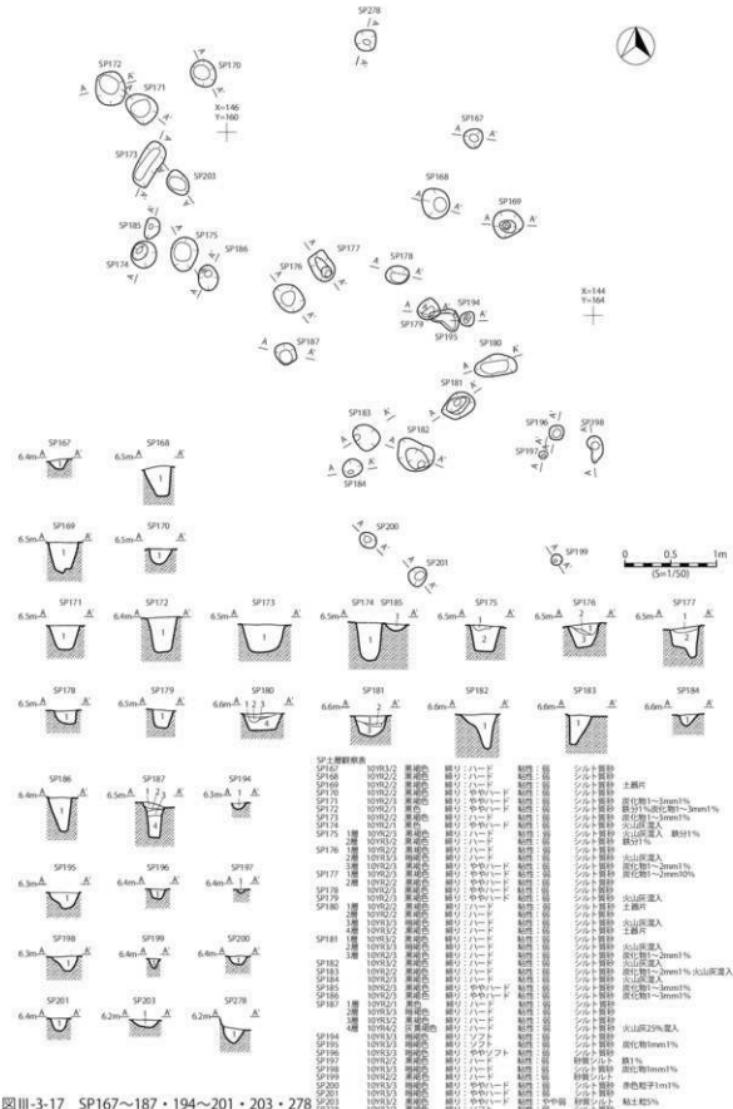


図III-3-15 SP155～157



図III-3-16 SP158・159・161～166・188～193

SP158	土器破片	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm	土器片
SP159	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP161	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP162	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP163	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP164	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP165	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP166	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP167	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP168	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP169	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP170	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP190	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP191	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP192	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP193	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		
SP195	10YR2/3	褐色	硬質	Ⅲ	シルト	1mm		



図III-3-17 SP167~187・194~201・203~278

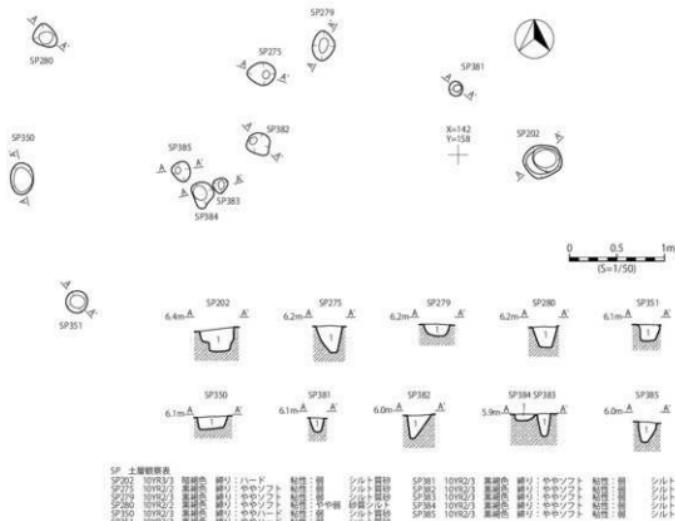


図 III-3-18 SP202・275・279・280・350・351・381～385

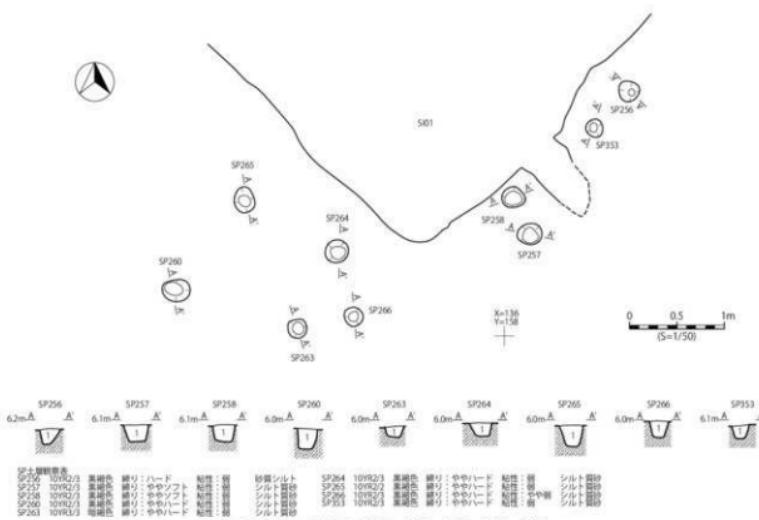
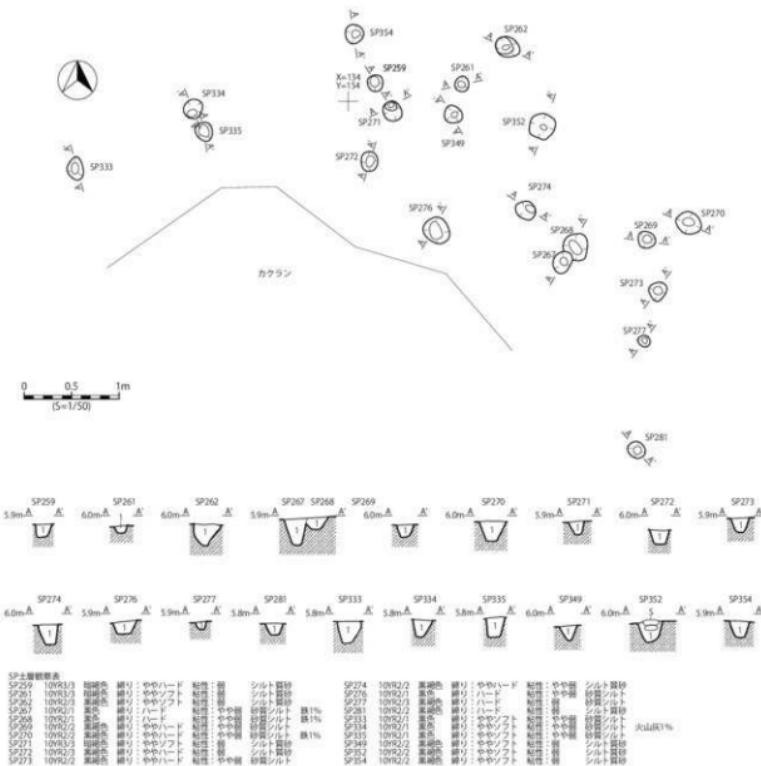


図 III-3-19 SP256～258・260・263～266・353



図III-3-20 SP259・261・262・267~274・276・281・333~349・352・354

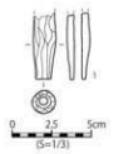
唯一SP182から管状土錐1点が確認された。以下、柱穴跡の平面図および土層断面図、出土遺物を図示する。

第182号柱穴 (SP182、図III-3-21)

1は土錐である。一方の端部が欠損している。端部から中央部にかけて太くなる形状を呈する。中心は垂直に穿孔されており、外面はミガキが施される。

(2) 出土遺物

遺構内外から主に平安時代に属する土師器は6,569.7 g出土した。須恵器は1点のみ確認された。このうち、接合および復元を終えたもので各遺構や諸特徴を考慮して30点を図化した(図III-3-26)。遺構内出土の土師器は各遺構の記述を参照されたい。ここでは遺構外出土の土師器および須恵

図III-3-21
SP182出土遺物

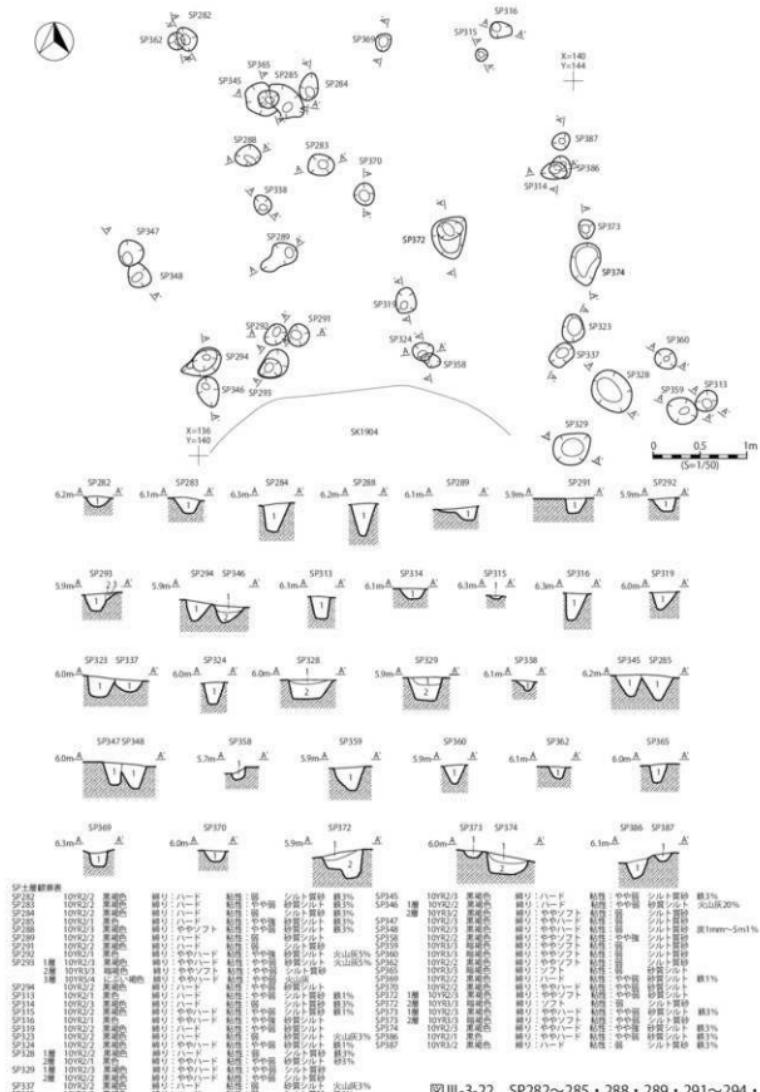


図 III-3-22 SP282~285・288・289・291~294・
313~316・319・323・324・328・329・337・
338・345~348・358~360・362・365・369・370・372~374・386・387

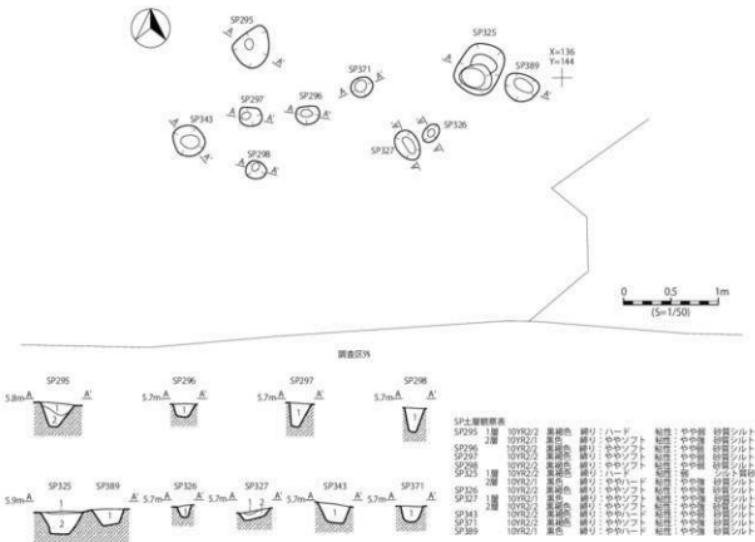


図 III-3-23 SP295～298・325～327・343・371・389

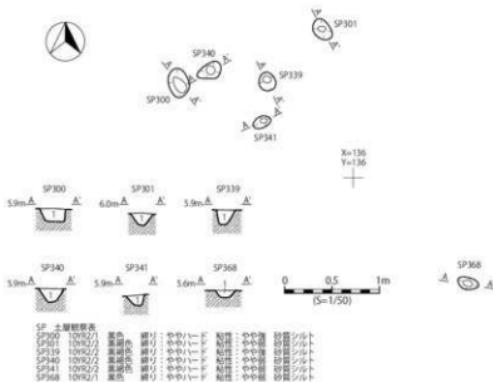
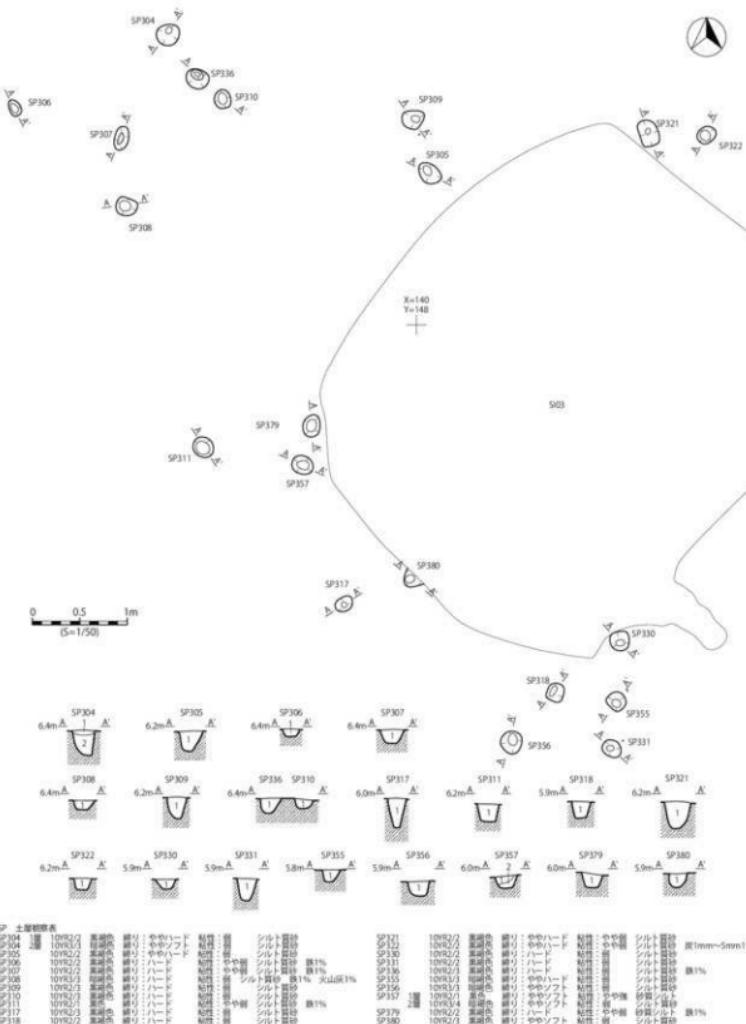


図 III-3-24 SP300・301・339～341・368



図III-3-25 SP304~311・317・318・321・322・330・331・336・355~357・379・380

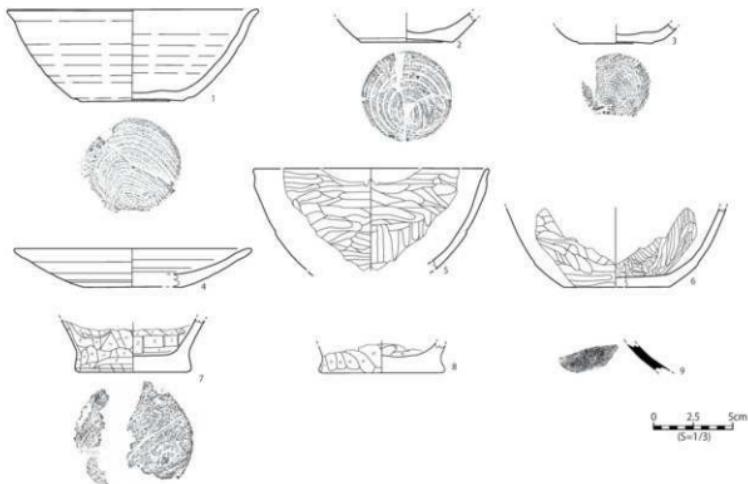
器について詳細を述べる。土師器・須恵器は主にⅢ層で確認され、竪穴建物跡周辺で確認されたものが多かった。土師器の器種は壺と甕のみで、須恵器は破片のため判別が難しいが、壺の肩部と推測される。以下、各土器ごとの詳細を述べる。

i. 土師器

1～4はロクロ整形の壺である。1は底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸みを帯びる。底部は高台をもつ。外面内面ともにロクロナデ調整が施される。2～3は底部のみ残存する。1～3は回転糸切痕が確認できる。2は無回転糸切痕で太めの糸が使用されており、胎土に砂粒が多く粉状に細かいため、水窓された胎土を使用していると考えられる。4は底部から直線的に立ち上がり、皿状の器形を呈する。外面内面ともにロクロナデ調整が施される。底面の調整は欠損のため不明である。5・6は非ロクロの壺である。5は底部が欠損する。体下部からゆるやかに立ち上がり、口縁部外面に段をもつ。壺環状の器形を呈するとみられる。体部中央に不明瞭な段をもち、調整は体部外面内面ともにミガキが施される。6は体上半が欠損する。底部からゆるやかに立ち上がる器形を呈し、体部下方に不明瞭な段をもつ。調整は外面がミガキ、内面はミガキと黒色処理、底面はナデが確認できる。7・8は甕の底部である。ともに底部がくびれをもち立ち上がる器形を呈する。7は外面がユビナデ、内面は横位のヘラナデ調整、底面は筋状のナデ調整が施される。8は外面内面ともにユビナデ調整、底面はナデ調整が確認できる。

ii. 須恵器

9は須恵器である。破片のみの出土であるが、形状から壺の肩部とみられ、外面内面にロクロナデ痕が確認できる。肉眼観察であるが、胎土・焼成など諸特徴から非五所川原産と考えられる。



図III-3-26 3区遺構外出土土師器・須恵器

第4章 自然科学分析

第1節 青森県、五所川原市、五月女沼遺跡の火山灰の帰属について

弘前大学大学院・理工学研究科
柴 正敏

五所川原市、五月女沼遺跡の土層より、3層の火山灰層が観察され、採集された。これらの試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を以下に示した。

火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。試料 No.1 の 1 試料について、電子プローブマイクロアナライザー（EPMA）を用いて、ガラスの化学組成を決定した（図IV-1-1 及び表 1）。

ガラスの形態及び構成鉱物、ならびにガラス粒子の発泡度・色・粒径分布、ガラスは以下のように帰属される：

試料 1 および 2：白頭山苦小牧テフラ（B-Tm）のガラスのみからなる試料：

アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含み、褐色ガラス、石英（斑晶）及びホルンブレンドを含まない。また、EPMA 分析値から、本試料のガラスの化学組成は、アルカリ流紋岩質およびアルカリ粗面岩質であり（図 1 および表 1 参照）、ポリモーダルの特徴を示す。

バイモーダルなマグマの活動は 10 世紀後半部の ^{14}C スパイクに対応できるとされ、本テフラの活動は西暦 946 年の冬とされる。

試料 No.1 および 試料 No.2 の 2 試料が B-Tm に帰属できる。

試料 1：3 区、SiO₂、座標 Z 3、中央部

試料 2：3 区、SiO₂、座標 Z 5、B-Tm 火山灰

試料 3：少量の火山ガラスを含む砂質粘土層。

火山ガラスの形態は軽石型及びバブルウォール型である。

主要な鉱物は、粗粒な斜長石及び石英よりも、褐色ガラスを含む。しかし、アルカリ長石、エジリンオージャイト、ホルンブレンドを含まない。本堆積物を構成するガラスは、その形態、褐色ガラスの存在および共存鉱物より十和田テフラ a のガラスに帰属できる。このテフラは、西暦 915 年の十和田カルデラ噴火により形成されたものである。

試料 No. 3 の 1 試料。

試料 3：3 区、SK1901、座標 Z3

参考文献

青木かおり・町田 洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — K₂O-TiO₂

図によるテフラの識別. 地質調査研究報告、第57卷、第7/8号、239-258.

Hakozaki et al.(2018) Radiocarbon 61:261-239.

Hayakawa, Y.(1985).Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.

Machida, H.(1999).Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第38卷、194-201.

町田 洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス 一日本列島とその周辺一、東京大学出版会、pp.336.

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)、弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19.

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 一字樽部の一露頭を例として一、弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17.

柴 正敏・佐々木 実(2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第28巻、第5号、322-325.

表1 19五月女窓遺跡出土火山灰試料(試料1)に含まれる火山ガラスのEPMA分析結果

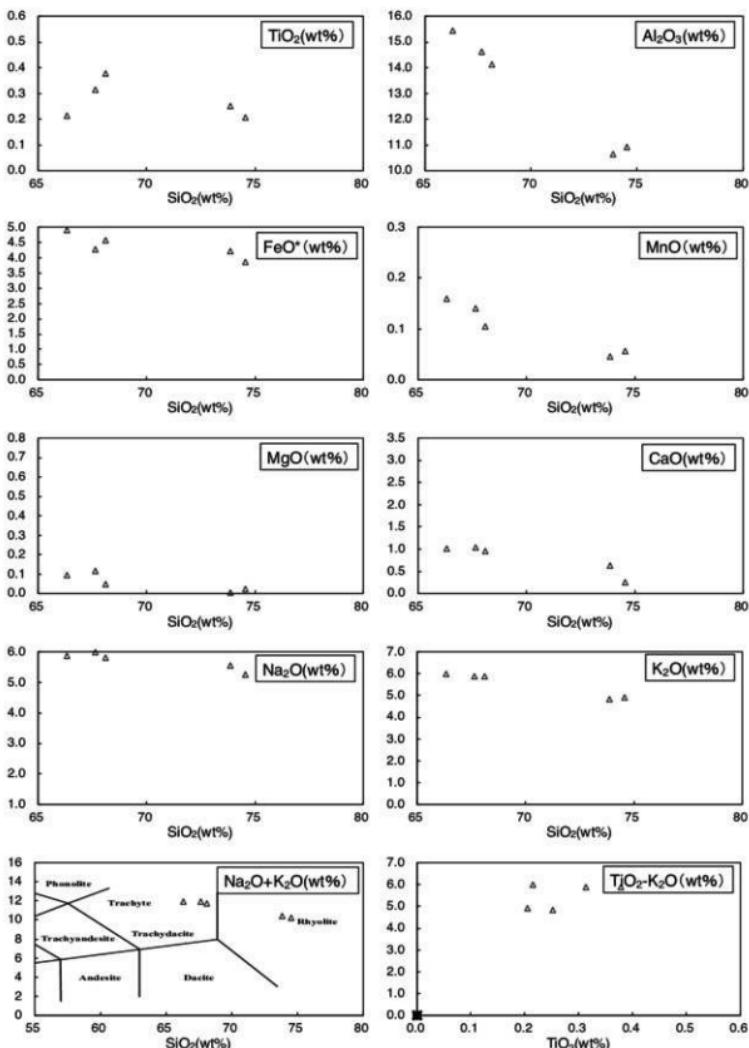
重量%

No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	64.02	0.21	14.89	4.72	0.15	0.09	0.97	5.67	5.80	96.51
2	60.69	0.28	13.10	3.84	0.13	0.11	0.93	5.38	5.25	89.69
3	66.16	0.37	13.73	4.43	0.10	0.05	0.93	5.65	5.71	97.12
5	69.06	0.24	9.93	3.95	0.04	0.00	0.59	5.17	4.51	93.50
9	70.63	0.20	10.32	3.67	0.05	0.02	0.22	4.98	4.64	94.72

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最大値	60.69	0.20	9.93	3.67	0.04	0.00	0.22	4.98	4.51	89.69
最小値	70.63	0.37	14.89	4.72	0.15	0.11	0.97	5.67	5.80	97.12
平均値	66.11	0.26	12.39	4.12	0.10	0.05	0.73	5.37	5.18	94.31
標準偏差	3.962	0.07	2.173	0.437	0.047	0.043	0.322	0.30	0.592	2.951

No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	66.33	0.21	15.43	4.89	0.16	0.09	1.01	5.87	6.01	100.00
2	67.67	0.31	14.61	4.28	0.14	0.12	1.03	6.00	5.85	100.00
3	68.13	0.38	14.13	4.56	0.10	0.05	0.96	5.82	5.88	100.00
5	73.86	0.25	10.62	4.22	0.05	0.00	0.64	5.53	4.83	100.00
9	74.56	0.21	10.89	3.88	0.06	0.02	0.23	5.26	4.89	100.00

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最大値	66.33	0.21	10.62	3.88	0.05	0.00	0.23	5.26	4.83	100.00
最小値	74.56	0.38	15.43	4.89	0.16	0.12	1.03	6.00	6.01	100.00
平均値	70.11	0.27	13.14	4.37	0.10	0.06	0.77	5.69	5.49	100.00
標準偏差	3.81	0.072	2.223	0.38	0.05	0.047	0.341	0.299	0.578	



$\text{SiO}_2 - (\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$ 図の岩種判定境界線は LeBas et al. (1986) による。 FeO^* は二価の鉄の酸化物を表す。

図IV-1-1 B-Tm 火山灰の Harker 図

第2節 漆器の塗膜分析結果

弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター

片岡 太郎

1. はじめに

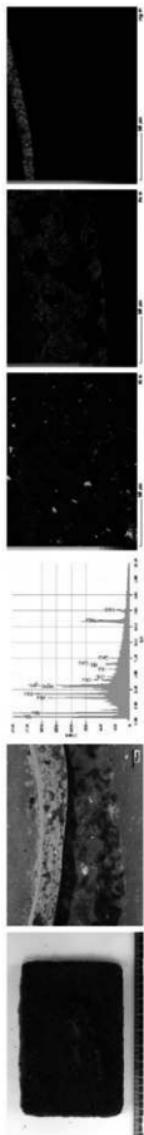
漆器 1、漆器 2、漆塗膜破片の塗膜分析結果を報告する。

2. 分析資料と分析方法

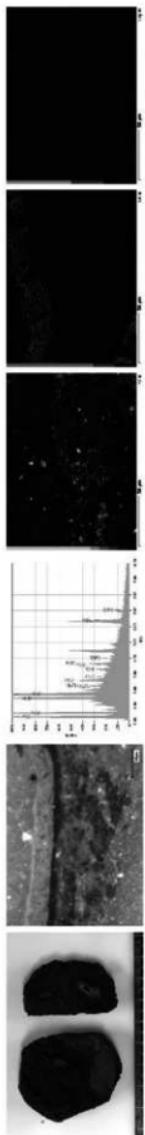
分析資料は、漆器 1、漆器 2、漆塗膜破片の 3 点である。いずれの資料も 3 区 SK1902 から出土した。資料から極小片（ 2 mm^3 程度）を採取し、断面観察用の試料とした。試料をエポキシ樹脂（BUEHLER EpoxiCure）で包埋固化後、研磨して薄片プレパラートを作成した。光学顕微鏡像（透過および反射像）の観察と撮影は、デジタルマイクロスコープ（キーエンス VHX-2000）を使用した。反射電子像（BEI）と元素マッピング（SEM-EDS マッピング）は、電子顕微鏡（日本電子 JCM-6000）と電子顕微鏡据え付けのエネルギー分散型蛍光 X 線検出装置（日本電子 JED-2000）を使って解析した。電子顕微鏡の観察と元素マッピング条件は、低真空モード、加速電圧 15kV、スイープ回数 10 回である。

3. 結果

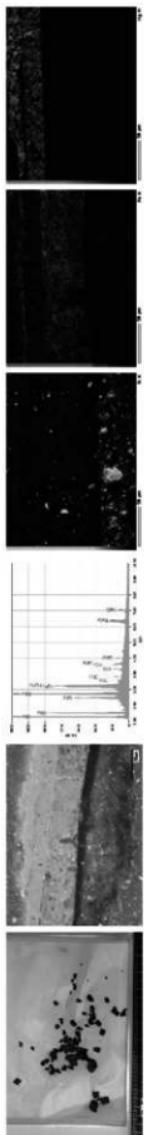
漆器 1（図IV-2-1）は、胎部に漆を 1 層塗り、Fe を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）1 層、さらに Hg を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）を 1 層塗り重ねた塗膜構造である。漆器 2（図 IV-2-2）は、胎部に漆を 1 層塗り、Fe を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）1 層塗り重ねた塗膜構造である。漆器塗膜破片（図 IV-2-3）は、胎部に漆を 1 層塗り、Fe を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）1 層、さらに Hg を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）を 2 層塗り重ねた塗膜構造である。いずれの資料の胎部の素材は不明である。また、Fe を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）は非パイプ状ベンガラであり、Hg を主成分とする赤色顔料（不定形粒子状）は水銀朱と推定される。



図IV-2-1 漆器1の塗膜構造
左から、現状写真、塗膜構造の光学顕微鏡像、蛍光X線スペクトル、BEI、Si map、Fe map



図IV-2-2 漆器2の塗膜構造
左から、現状写真、塗膜構造の光学顕微鏡像、蛍光X線スペクトル、BEI、Si map、Fe map



図IV-2-3 漆塗破片の塗膜構造
左から、現状写真、塗膜構造の光学顕微鏡像、蛍光X線スペクトル、BEI、Si map、Fe map

第3節 五月女范遺跡の花粉分析

森 将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

青森県五所川原市に所在する五月女范遺跡では、遺跡周辺の古環境を検討するために、堆積物が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析の結果を示し、考察した。

2. 試料と方法

分析試料は、2区のP-300 IV層から採取された礫混じり黒色（7.5YR1.7/1）細粒砂1点である。この試料について、以下の手順で分析を行った。

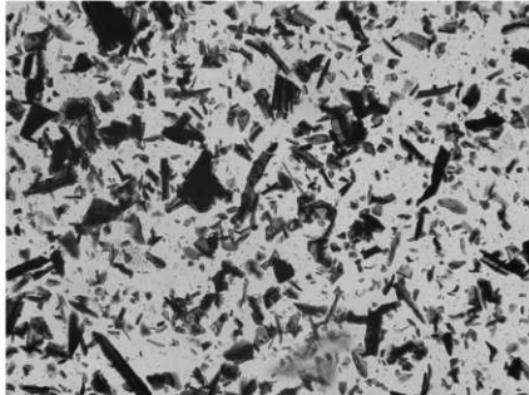
試料（湿重量約4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。試料には花粉が含まれていなかったため、プレパラート1枚の全面を検鏡するにとどめた。

3. 結果

検鏡の結果、試料には花粉化石が含まれていなかつた。プレパラートの状況を図版1に示す。なお、花粉化石が得られていないため、図表は作成していない。

4. 考察

花粉の大きさは大多数が $10 \sim 100 \mu\text{m}$ の範囲に入り、泥粒子の粒径とほぼ同じ大きさである。よって、植物から散布された花粉粒は、陸域や水域に落下した場合、泥などの微細粒子と



図IV-3-1 プレパラートの状況

0.1mm

同じような挙動を示すと思われる。今回分析した試料は砂が主体となっている。泥の粒径に近い花粉は、砂と堆積環境における挙動が異なるため、砂を主体とした本試料には花粉が入っていないかったと思われる。今回の分析試料には花粉化石が含まれていないため、古植生について言及するのが難しい。

第4節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・黒沼保子

1. はじめに

五所川原市の五月女遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、3 区の住居跡 SI02 のカマドの覆土から出土した炭化材 1 点（炭化物 16）である。炭化材は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代・曆年代を算出した。

表 1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-41813	調査区：3 区 遺構名：カマド 部位：覆土・床下 遺物 No.：炭化物 16	種類：炭化材（カエデ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸洗浄：塩酸；1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸；1.2 mol/L

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代・曆年較正結果を、図 1 に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% あることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.4(較正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、1 σ 曆年年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2 σ 曆年年代範囲は 95.45% 信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二

重曲線は曆年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

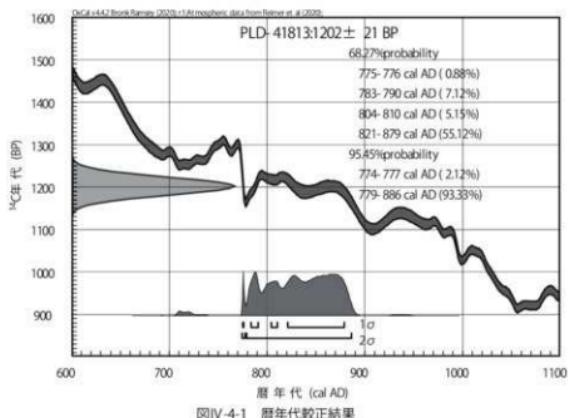
測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-41813	-28.42 \pm 0.24	1202 \pm 21	1200 \pm 20	775-776 cal AD (0.88%) 783-790 cal AD (7.12%) 804-810 cal AD (5.15%) 821-879 cal AD (55.12%)	774-777 cal AD (2.12%) 779-886 cal AD (93.33%)

4. 考察

SI02 のカマド覆土から出土した炭化材（炭化物 16）の 2σ 曆年代範囲は、774-777 cal AD (2.12%) および 779-886 cal AD (93.33%) であった。これは 8 世紀後半～9 世紀後半で、奈良時代～平安時代前期の曆年代である。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど

古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。



参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Sounthorpe, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第5節 五月女泡遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

五所川原市の五月女泡遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は3区の住居跡SI02とSI03から出土した炭化材2点（炭化物16、23）である。SI02出土の炭化材は、年代測定の結果、奈良～平安時代前期の暦年代を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。

樹種同定では、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台上に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、SI02の炭化物は広葉樹のカエデ属、SI03の炭化物23は広葉樹のハリギリであった。結果を表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) カエデ属 Acer ムクロジ科 図版1 1a-1c (SI02 炭化物16)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部纖維の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は單一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。木材組織からはチドリノキーカージカエデ以外は識別困難なため、この2種を除いたカエデ属とする。材は全体的に緻密で、韌性がある。

(2) ハリギリ Kalopanax septemlobus (Thunb.) Koidz. ウコギ科 図版1 2a-2c (SI03 炭化物23)

年輪のはじめに大型の道管が1列に並び、晩材部の小道管は複合して接線状もしくは帶状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一である。放射組織は1～5列幅で、平伏細胞の上下端が方形細胞の異性である。

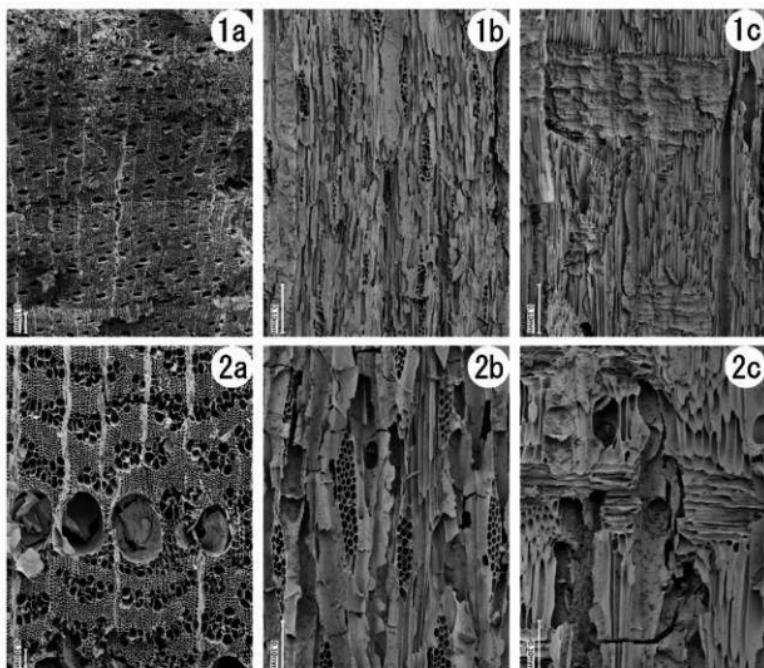
ハリギリは暖帯から亜寒帯に分布する落葉高木で、材の耐朽性や保存性は高くない。

表1 樹種同定結果

分析No.	地区	遺構	遺物名	出土位置	樹種	年代測定番号
1	3区	SI02	炭化物16	覆土、床上	カエデ属	PLD-41813
2	3区	SI03	炭化物23	+	ハリギリ	+

4. 考察

SI02から出土した炭化物16はカエデ属、SI03から出土した炭化物23はハリギリであった。カエデ属の材は緻密で韌性があり、ハリギリの材は硬さや加工性が中庸である（平井、1996）。どちらも用途は不明であるが、建築部材や器具材、燃料材などの可能性が考えられる。



図IV-5-1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. カエデ属 (SiO_2 炭化物 16)、2a-2c. ハリギリ (SiO_3 炭化物 23)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

引用・参考文献

平井信二（1996）木の大百科。394p, 朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー。449p, 海青社。

第5章 総括

五月女遺跡は、十三湖の北岸の五所川原市相内の西側に位置する。調査の結果、前回調査で確認された堂林式（十腰内V式並行）・上ノ国式（大洞B～C1式並行）に加え、大平段階（大洞A2式並行）の縄文時代後葉～晩期後葉、および古代にかけて、津軽海峡を挟んだ北海道島との人・モノにおける交流があったことが判明した。

本調査区では縄文時代は後期前葉（十腰内I式）から晩期末葉（大洞A式）までの継続性が認められ、その後は古代（平安時代、9～11世紀）と断続的に利用されていたことが判明した。調査範囲から発見された縄文時代の遺構・遺物は、土坑、土坑墓、遺物捨て場、柱穴をはじめ、縄文土器、石器、土偶、土製品、石製品、漆器である。古代の遺構・遺物は竪穴建物跡、土坑、柱穴が確認され、遺物は土師器、土錐が確認された。以下、縄文時代と古代の順に述べる。

1. 縄文時代

本調査では土坑9基、土坑墓1基、遺物捨て場1カ所、焼土遺構1基、集石遺構1カ所、柱穴62基が確認された。1区の遺構は遺物が出土しなかったため詳細は不明であるが、2区の土坑からは後期前葉（十腰内I式）の土器が確認され、従来よりも遺跡形成が早いことが判明した。3区では周溝とマウンドを伴う土坑墓（SK1902）が1基確認された。前回調査で確認された土坑墓群の一連の遺構と考えられるが、土坑墓群から約60m東側に単独で配置されたことの意味は今後検討が必要である。なお、SK1902の時期は、前回調査でマウンドを有し、遺構底面に周溝がめぐる型式が多く確認された7群時期の遺構であると考えられる。また、残存状況が良好ではないため器種は不明であるが漆器が出土し、第4章第2節の分析の結果、3点のうち2点はベンガラと水銀朱を塗り重ねた赤彩の可能性があることが判明した。

本調査では調査区全体で縄文土器が3,109点、425.615.6g確認された。1区～3区にかけて主体となる時期は晩期後葉（8群）であるが、五月女遺跡における過去の調査で確認されていなかった晩期後葉～末葉（9・10群）の土器が今回の調査で初めて確認された。出土量は少量であるが、1～3区内における晩期後葉～末葉（9・10群）土器の出土位置と点数を図示した（図V-1-1）。出土位置や点数に規則性や際立った特徴はみられないが、2区から晩期末葉（10群）の土器は確認されておらず、また1区では出土数が増加していることがわかる。前回調査の主体となる時期は晩期中葉（7～8群）であったことから、遺跡内における活動は徐々に東側へと移動していくことが推測される。五月女遺跡から北東へ約1kmの地点に大洞A式が確認された岩井・大沼遺跡（五所川原教委2001）があることから、双方の遺跡の関係性が今後重要となるであろう。

石器・石製品等は6,854点、96.084g確認された。石器の種別や構成に前回調査との差異は特にみられないが、前回調査で確認されたメノウ製の小型石錐および緑色凝灰岩の玉、もしくは玉未成品が本調査でも確認されたことから、晩期後葉～末葉にかけても玉造りが生業として継続されていたことが判明した。また、2区では黒曜石の剥片が約41,454.8g確認された。主に遺物捨て場に伴って確認されたが、剥片の出土量に対して黒曜石製の石器が少量であることから、黒曜石の利用目的や产地同定などが今後の課題である。3区では凝灰岩製の岩版が確認された。片面に精緻な流水文状の線

刻があり、肉眼観察であるが赤彩の痕跡はみられなかった。

なお、前回調査に続き本調査でも縄文時代晚期の竪穴建物跡は確認されなかった。晚期中葉の土坑墓群に加え晚期後葉～末葉までの遺跡の継続が判明したため、今後の調査で遺跡活動時期の居住域が確認されれば、五月女泡遺跡の性格および様相の把握につながるであろう。

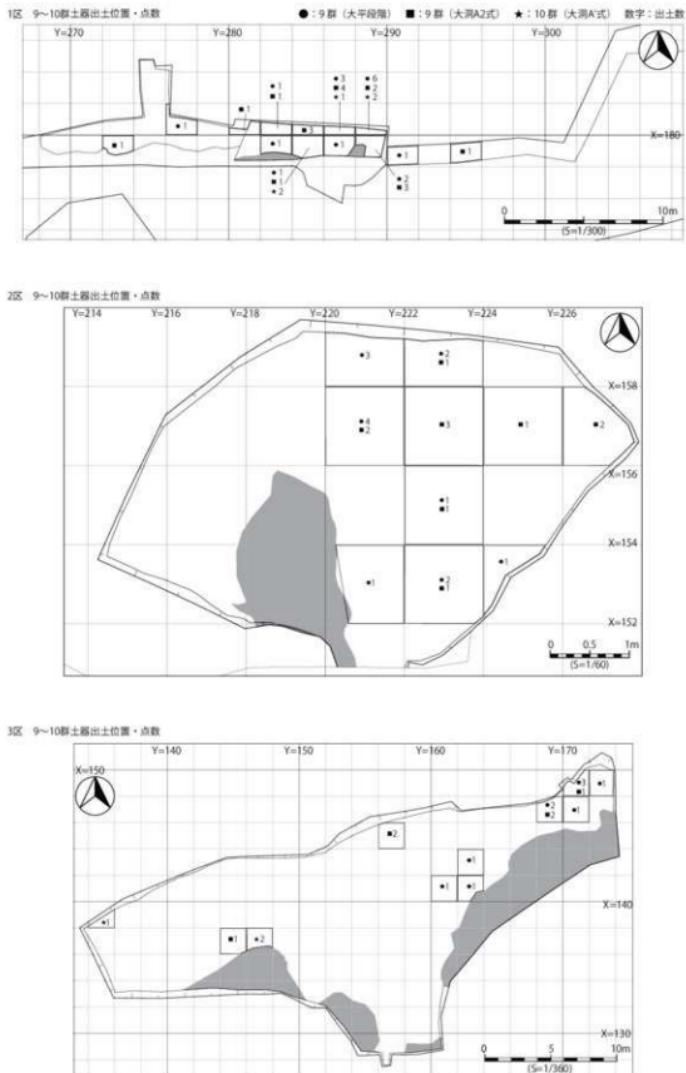
2. 古代

本調査では古代の遺構は3区から確認された。平安時代の竪穴建物跡（SI01～03）が3棟、土坑（SK1901）1基、柱穴239基が確認された。竪穴建物跡3棟は、軸方向を概ね揃えて南東向きにカマドが配置される。覆土中層には白頭山・苦小牧火山灰（B-T m）が確認された。前回調査では、擦文土器が出土した奈良時代（8世紀）の竪穴建物跡1棟が調査されたが、北向きにカマドが配置されていたことと対照的である。

SI02の時期を検討した結果、遺構内から出土した环の体部には奈良時代のものと比較して明瞭ではない段が形成されていることに加え、カマドの支脚として利用されていた甕は頸部がくびれ口縁部が大きく外反し、口唇部に断続的に刻目が連続するといった擦文土器の器形の特徴を備えているが、肉眼観察から胎土は土師器の様相を呈することから、在地化した擦文土器の可能性がうかがえる。隣接する清水遺跡（青森県教委2002）から出土した土師器とも類似し、カマドから検出された炭化物の放射性炭素年代測定の結果をふまえると、遺構の時期は9世紀前半と考えられる。統いてSI03・SI01と、検出された3棟の時期は出土遺物から9世紀前半～10世紀前半に納まると考えられる。よって前回調査を通じて五月女泡遺跡では、8世紀から10世紀前半まで継続的もしくは一定期間を置いたとしても断続的に遺跡における居住および活動があったことが判明した。

SK1901は覆土中層に十和田a火山灰を含み、五月女泡遺跡では初めて確認された。遺構からは土師器等の遺物が出土しなかったため遺構の詳細な時期は不明である。

3区で確認された柱穴の時期については、前回調査で確認された柱穴群と規模・配置の様相に共通点が多く、竪穴建物跡や土坑より新しい10世紀前半以降の遺構と考えられる。



図V-1-1 1区~3区 9~10群土器出土位置・点数

引用・参考文献

- 青森県史編さん考古部会（2013）『青森県史資料編考古2 繩文後期・晚期』
- 青森県史編さん考古部会（2005）『青森県史資料編考古3 弥生～古代』
- 青森県教育委員会（1995）『千刈遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第174集
- 青森県教育委員会（1997）『琴湖岳（2）遺跡－県道鰐ヶ沢蟹田道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』青森県埋蔵文化財調査報告書 第226集
- 青森県教育委員会（2002）『清水遺跡－県道鰐ヶ沢蟹田道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告一』青森県埋蔵文化財調査報告書 第331集
- 青森県教育委員会（2012）『福島城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第522集
- 宇部則保（1997）『7・8世紀の沈線文土器』『蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムⅡ・資料集一』日本考古学協会 1997年度秋田大会実行委員会
- 海津正倫（1976）『津軽平野の沖積世における地形発達史』『地理学評論』49
- 上條信彦編（2016）『八郎潟沿岸における低湿地遺跡の研究－中山遺跡発掘調査報告書－』冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書6
- 上條信彦編（2017）『八郎潟沿岸における縄文時代晩期末の研究－下台遺跡発掘調査報告書－』
- 小岩直人（2016）『十三湖の変遷と五月女泡遺跡の立地』『五月女泡遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（2016）『木古内町 大平遺跡（4）－高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』北埋調報第329集
- 五所川原市教育委員会（1988）『觀音林遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 五所川原市教育委員会（2016）『五月女泡遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 柳原滋高（2010）『五月女泡遺跡出土の弥生・奈良時代の土器について』『青森県埋蔵文化財センター研究紀要第15号』
- 市浦村教育委員会（1983）『市浦村 五月女泡遺跡』
- 市浦村教育委員会（1992）『オセドウ貝塚発掘調査概報（第1・第2次発掘調査概報）』
- 市浦村教育委員会（2001）『岩井・大沼遺跡－県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告－』市浦村埋蔵文化財調査報告書 第12集
- 関根達人・上條信彦編（2012）『下北半島における亀ヶ岡文化の研究 青森県むつ市不備無遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告8
- 富山大学人文学部考古学研究室（2002）『津軽唐川城跡－古代環濠集落の調査－』富山大学人文学部考古学研究室 第7冊
- 豊島勝藏（1984a）『笛畠貝塚遺跡』『市浦村史』第一巻 市浦村
- 豊島勝藏（1984b）『中島遺跡』『市浦村史』第一巻 市浦村
- 中泊町博物館（2012）『西山コレクション－奥津軽の至宝－』
- 中谷治宇二郎（1929）『東北地方石器時代遺跡調査予報』『人類学雑誌』第四四卷第三号
- 長谷部言人（1927）『円筒土器文化』『人類学雑誌』第四十二卷第一号
- 藤沼邦彦（1989）『亀ヶ岡式土器の文様の描き方』『考古学論叢II』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 山内清男（1929）『関東北に於ける織維土器』『史前学雑誌』第一巻第二号
- 吉田格・直良信夫（1942）『青森県相内村オセドウ貝塚』『古代文化』第十二卷第七号

調 査 写 真 図 版



1区 SK12、SP10・11 完掘



1区 焼土遺構



1区 土層断面



1区 出土遺物検出状況



1区 出土遺物検出状況



1区 出土遺物検出状況



1区 調査区



1区 調査区



1区 調査区



1区 調査区 東側セクション



1区 調査区 東側セクション



1区 調査区 東側セクション



2区 SK101 完掘



2区 SK102 完掘



2区 SK104 完掘



2区 SX02 (集石遺構)

調査写真図版 2



2区 遺物捨て場検出



2区 遺物捨て場検出



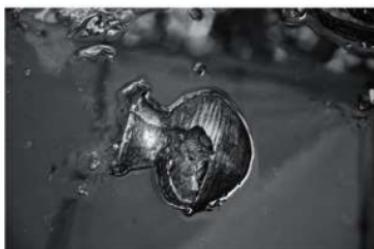
2区 遺物捨て場検出



2区 遺物捨て場検出



2区 遺物検出



2区 遺物検出



2区 調査風景



2区 調査完了

調査写真図版 3



3区 SK1902 セクション



3区 SK1902 完掘



3区 SK1902 漆器検出



3区 SK1905 セクション



3区 SK1905 完掘



3区 SK1904 セクション



3区 SK1904 完掘



3区 SI01 セクション

調査写真図版 4



3区 SI01 カマド



3区 SI01 完掘



3区 SI02 セクション



3区 SI02 セクション



3区 SI02 カマド



3区 SI02 完掘



3区 SI03 セクション



3区 SI03 カマド

調査写真図版 5



3区 SI03 炭化材検出



3区 SI03 完掘



3区 SI03 調査風景



3区 SK1901 セクション



3区 SK1901 完掘



3区 土層ペルト



3区 調査区 空撮



3区 調査区 遠景

調査写真図版 6

遺 物 写 真 図 版

凡 例

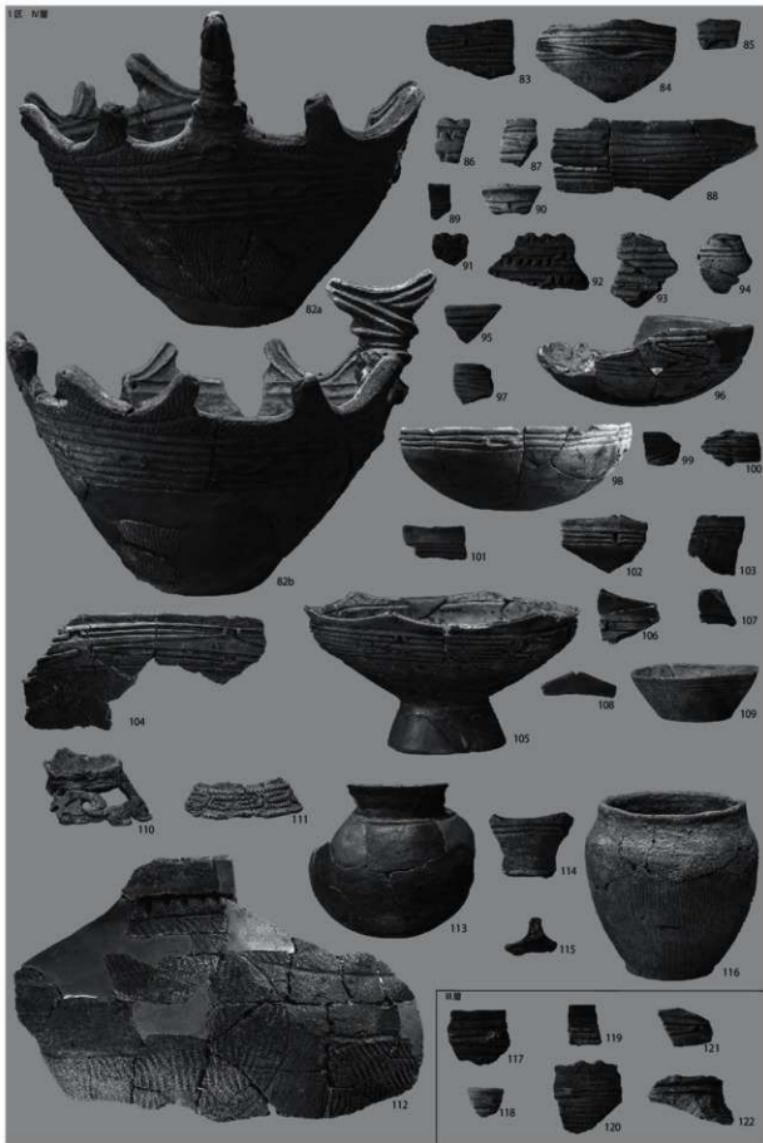
1. 写真の図番号は報告書本文中の図番号に拠った。
2. スケールに関しては、基本的には土器・土偶・土製品・ミニチュア土器は約 1/3、剥片石器では、尖頭器・石鏃・石錐・小型石錐・は約 2/3、石匙・石鑓・スクレイバーは約 1/3 とした。
耳飾・土製垂飾・玉類は等倍とした。
その他の砾石器等は基本的に約 1/3 とした。



遺物写真図版 1 1区出土土器 V層 IV層



遺物写真図版2 1区出土土器 IV層



遺物写真図版 3 1区出土土器 IV層 III層